

『打聞集』私註

東 辻 保 和
(人文学部国語学国文学研究室)

Annotation on UCHIGIKISHŪ

Yasukazu HIGASHITSUJI

凡 例

1. 小稿は、『打聞集』研究の一環をなすものであって、本来「本文篇」に付随させるべきものであるが、紙数と、規程上横組みを余儀無くされていることとの関係で、「私註」を先に発表させていただく。「本文篇」のほか「語彙索引」「漢字索引」の用意も有るが、これらは、いずれ機会を見て発表させていただく所存である。
2. 底本には、古典保存会複製本を用いた。不明瞭な個所は、京都国立博物館所蔵の原本と照会して確かめることが出来た。
3. 註は、本文を如何に読むかの根拠を示すことを主としているので、語義・用法等に就いては触れるところが少い。
4. 小稿を成すに当っては、次の諸書から多大の学恩を蒙った。記して感謝申し上げる。

- ① 説話集研究会『総索引付打聞集』（昭和27年1月）
- ② 竹岡正夫『打聞集』訓釈（香川大学学芸学部研究報告18，昭和39年8月）
- ③ 中島悦次『打聞集』（昭和40年5月 白帝社）
- ④ 『打聞集』を読む会『打聞集 研究と本文』（昭和46年8月 笠間書院）

これら諸先学の説と重複することの無いように努めたが、記述の都合上、止む無く重複した所が有る。その場合、引用には次の略称を用いる。

- ① → 総索引付 ② → 訓釈 ③ → 中島本 ④ → 研究

5. 頻出する典拠の文献名・参考文献名には略称を次のように用いた。

〔前田本字類抄〕…前田家本色葉字類抄（『色葉字類抄 研究並びに索引^{本文編}』による）

〔黒川本字類抄〕…黒川家本色葉字類抄（同上）

〔名義抄〕…観智院本類聚名義抄（図書寮本については、その都度示す）

〔静本運歩色葉集〕…静嘉堂文庫蔵本運歩色葉集（『中世古辞書四種研究並びに総索引』による）

〔元亀本運歩色葉集〕…京都大学蔵元亀二年本運歩色葉集（^{京都大学文学部}国語学国文学研究室 編輯 影印本による）

〔日葡〕…日葡辞書（勉誠社版複製による）

〔足利本法華経〕…観阿寺蔵本元徳二年写足利本仮名書き法華経（中田祝夫編影印本文による）

〔今昔〕…日本古典文学大系本今昔物語集

〔宇治〕…日本古典文学大系本宇治拾遺物語

〔古本〕…古本説話集（『古本説話集総索引』による）

〔法華百座〕…法華百座聞書抄（『法華百座聞書抄総索引』による。尚、本書を〔法華百座総索引〕と略称する）

6. 親鸞聖人筆写本として、教行信証・西方指南抄・三帖和讃其他を用いた。その用例の所在は

『親鸞聖人真蹟集成』の影印本文に拠った。

宝物集は『古鈔本宝物集貴重古典籍叢刊8』の影印本文に拠った。

和名抄は『和名類聚抄^{古写本}_{高橋本}本文および索引』に拠った。

節用集類は、『古本節用集六種研究並びに総合索引』『文明本節用集研究並びに索引』『印度本節用集^{古本}_{四種}研究並びに総合索引』『誓言字考節用集研究並びに索引』『^{惠空}編^編節用集大全研究並びに索引』『古本下学集七種研究並びに総合索引』に拠った。

其他に就いては、その都度明示した。

7. 本文篇との関連を容易に知り得るように、説話番号・説話の標題・各説話の最初の行数と最後の行数とを掲げた。又、冒頭の数字は本文篇での（即ち複製本での）通し行数を示す。因みに本文篇の最終行は427である。

終りに当り、諸賢の御批正を懇願致すと共に、特に漢字音、日葡辞書に関して御教示いただいた沼本克明・三保忠夫・菅原範夫諸氏、貴重な原本の閲覧に便宜を計って下さった京都国立博物館の木下政雄氏、終始御指導を賜った小林芳規先生に深甚の謝意を表し奉る。

<第一話 達^タ和尚事> 1行~19行

- 1 大堂（おほきなるだう） 249に「大キナルカ」と有る。
種く（しゆじゆ） 種（平）く（平濁）〔金沢文庫蔵解脱門義聴集記5〕尚、〔法華百座総索引、補註、オ302〕参照。

顕 タマフテ〔前田本字類抄、ア部辞字〕に、「アラハス・アラハル」の訓が有る。

有智（うち） 有無く為く徳〔十卷本伊呂波字類抄、ウ部疊字〕とあるのに従う。

- 2 達^タ磨和尚（だるまくわしやう） 達磨和尚〔南无阿弥陀仏作善集41〕

「和尚」の訓みについては、親鸞聖人の真蹟によれば、次のようである。

善^{セン}導^{ドウ}和^ワ尚^{シヤウ}〔西方指南抄、上本93ほか〕

曇^{トム}鸞^{ラン}和^ワ尚^{シヤウ}〔浄土和讃3ほか〕

綽^{シヤク}和^ワ尚^{シヤウ}〔浄土高僧和讃65〕

源^{クエン}信^{シン}和^ワ尚^{シヤウ}〔浄土高僧和讃97〕

聖^{サイ}覚^{カク}和^ワ尚^{シヤウ}〔尊号真像銘文略本82ほか〕

法^{ホフ}道^{ドウ}和^ワ尚^{シヤウ}〔唯信抄文意31〕

廬^ロ山^{サン}ノ弥^ミ陀^タ和^ワ尚^{シヤウ}〔同上〕

浄^{シヤウ}業^{コフ}和^ワ尚^{シヤウ}〔同上〕

の如くに、固有名に付いている「和尚」は、国の内外を問わず、また、宗派も天台宗に限らずに「クワシヤウ」と読まれている。だが一方に於いては、「建磨^{ケン}元^{ゲン}年^{ネン}ノコロ聖人ツノクニノ勝尾^{カチオ}トイフトコロニオハシケル時^{トキ}祇陀^{キタ}林^{リン}寺^ジノ一和尚^{イチワシヤウ}ニテ待^{マテ}ケル西^{サイ}成^{セイ}房^{ハウ}トイフ僧^{ソウ}ノユメニミルヤウ〔西方指南抄、中本103〕、「丹後国^{タムノクニ}シラフノ庄^{シヤウ}ニ別所^{ヘツショ}ノ一和尚^{イチワシヤウ}僧^{ソウ}アリケリ〔同上、中本118〕の如くに「ワシヤウ」の例も有るところから考えるのに、高僧の尊称としては宗派を問わず「クワシヤウ」が用いられたものかと思われる。天台宗では「クワシヤウ」、法相・律・真言の諸宗派では「ワジャウ」、禅宗では「ヲシヤウ」のように、宗派により相承の読み有ることが知られている。（鈴木一男「鑑真和上」の称呼について一字音語の清濁小論—<南都仏教15>、中村元編『仏教語大辞典』など）打聞集に登場する僧は天台宗系が多く、且、筆者兼源も天台僧と考えられるところからも、「クワシヤウ」と読むことにする。→補註1

- 3 聖人(しやうにん)〔前田本字類抄, シ部人倫〕による。
 功能(くのう) 功程クノウ く能〔十卷本伊呂波字類抄, ク部置字〕による。〔西方指南抄, 下末12, 24〕及び〔西本願寺本唯信抄55〕にもそれぞれ〔功能〕と有り, 明恵上人の〔自行三時礼功德義6〕にも同様「礼敬らいもやうの功能くのう」が見える。然るに, 明恵上人の〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記〕には「功能クノウ」とある。(この両書は三保忠夫氏の油印版による) また, 「功德」について見るのに, 〔法華百座, オ450〕に「クトク」, 〔浄土高僧和讃71・尊号真像銘文略本31〕に「功ク(上)徳トク(入濁)」とあるのを初めとして, 「クドク」と読むのが一般のようである。然るに, 〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記195〕では「如来にがひの功德クノウ」となっている。同趣の例は, 「功力」にも拾い得る。〔西方指南抄, 下末101〕には「功力」とあるが, 〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記177〕には「水火すいけつの功力クノウ」とあり, 「功」の音の仮名表記に, 「ク」と「クウ」との二種の有ることを知る。因みに法華経単字には「クウ」とある。このような現象について, 三保忠夫氏によれば, 「功」単字の字音として反省的に付ける場合(字書・音義も含めて)には「クウ」となり, 一方, 文脈あるいは口頭言語などの流れの中に於いては「ク」となるのではないか。東韻牙音の韻尾が音声的に自覚できるのは, 反省的規範的な述作の場合に止まったのではないか。と言われる。
 (参考文献) 三保忠夫「国語史料としての 吳文炳博士蔵本自行三時礼功德義」〔広島大学文学部紀要(東洋) 35〕
- 4 召ニ遣ス随遣テ(めしにつかはす。つかはすにしたがひて) 重ね型文接続と見てこのように読む。(参考文献) 山口仲美「平安朝文章史研究の一視点一文連接法をめぐって」(国語学98所収)
 所トコロく(ところどころ) 処トコロコロ(置符)〔前田本字類抄, ト部重点〕による。但し, 〔西方指南抄, 中末36〕には, 「処トコロ一処トコロ」とある。
- 6 堂寺(だうてら) 訓釈は「だうじ」とするが採らない。「Xicarú tocorode cano dö tera uo xenji no gotoquni fodo fete zöfit xerareta ni yotte」〔天草版平家物語P4の11=伊藤健君の教示〕, 「Dö tera. Igreja, ou templo.」〔日葡〕とあるのによる。
 劣ワキ(よわき) 訓は名義抄による。総索引付・中島本「劣ワキ」, 訓釈・研究「劣ロキ」
 実ノ(まことの) 75「実マコト」とあるのに従う。
- 7 本軀(ほんたい) 本(平)體(平濁) 雑部物様詞ホンタイ〔前田本字類抄, ホ部置字〕 訓釈「ほんてい」
- 8 本意(ほんい) 本(平)意(平) 人情部ホンイ〔前田本字類抄, ホ部置字〕 訓釈「ほい」
- 9 遠国(をんどく) 〔教行信証三57〕に「遠(平)離(上)シテ」, 〔西方指南抄, 上本90〕に「遠近オンコンチヤウケン長短」, 〔黒本本・易林本節用集〕に「遠国オンコク」とある。院政鎌倉期においては, 鼻音に後続する漢字音が連濁する確率の高いことについては, 小林芳規先生の御論が有る。〔皇太子聖徳奉讃8〕に「東(去)方(上濁)日(入)本(平)国(入濁)」とある如く, 「国」が連濁した例も有るところから, 本例も「をんどく」と読むことにする。但し, 〔前田本字類抄, エ部置字〕には「遠(上)国(入)」とあるから, 漢音で「ゑんこく」と読むことも可能であろう。(参考文献) 小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」(広島大学文学部紀要29巻1号)
- 12 結縁(けちえん) 結縁ケチエン〔和泉往来151〕, 結縁ノトモカラ〔西方指南抄, 中本72〕
 件聖(くだんのひじり) 件ノ結解ケンノケツゲ〔高山寺本古往来106〕

為結縁(けちえんせむがために) 訓釈は「けちえんのために」とするが採らない。本集では、21「伝ムカ為ニ」、140「送ラムカタメニ」、189「顕カタメニ」の如く、活用語を受ける場合は「～(ム)ガタメニ」とある。これに従って読む。

- 13 行テ(いきて) 本集の仮名書き例では、「イク」8例、「ユク」(ユク末160)1例となっている。
- 14 葬送セムトテスル 同題の表現法が236「打トテス」に見られる。
草鞋(さうかい) 鞞鞋サウカイ〔前田本字類抄, サ部雑物〕
- 16 聞テ申(ききてまうさく) 「申」を訓釈は「まうす」とする。そのようにも読めようが、本集には、「申サク」1例、「申ク」が4例有る。また、「申ス」は4例有るが、<申ス+会話文>の形を取っている例は無い。更に「申」(終止法)は6例有るが、その内、<申+会話文>の形を取り、その会話文が「申」の内容を表している例は2例である。この2例は、「申サク」または「申ク」の省記された形と考えられよう。
- 流砂(りうさ) 適^ニ流(平)砂(上) - 〔教行信証六末66〕
- 早ニ(すみやかに) 訓釈は「早く…ケリ」の呼応表現と見、「正しくは(中略)『サハ早ク此和尚ニコソアリケレ』と言うべきところ」と説く。他本は欠字にしてある。しかし、原本によれば「早ニ」の「ニ」がはっきり見える。訓は〔前田本字類抄, ス部辞字〕による。〔高山寺本古往来25〕に全訓の付いた例がある。
- 18 ナニ、カハセム 「ム」は諸本欠字にしてあるが、原本では薄いながらも「ム」と読める。
- 19 愁キ(なげき) 「なげき」以外に訓は考え難いが、管見の古辞書では、其の例が見付からない、あるいは、「愁歎」のような熟語が筆者の意識にあり、「歎」に引かれて「愁」をも「なげき」と読んだものか。例えば、〔文明本節用集, シ部愁芸門953〕に、「愁(平)傷(平)一歎(去)」とある。因みに、〔恵空編節用集大全〕は、「なげく」に29種の漢字を掲げているが、「愁」は見えない。

<第二話 尺迦如来験事> 20行~32行

- 20 晋ノ史弘^ニ〔今昔6の1〕には、「震旦ノ秦ノ始皇ノ時ニ、天竺ヨリ僧渡レリ」とある。「史弘」は「始皇」の宛字。「弘」は字音「コウ」、「皇」は「クワウ」であるから合致しないのであるが、この時代には、既に合拗音の直音化する傾向が認められ、これは、その早い例と考えられる。そこに更に開合の混乱の加わったものであろう。(以上は、沼本克明氏の教示による)。因みに〔西方指南抄, 上末94〕には「カノ秦ノ始皇カ」とある。
(参考文献) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号3)
- 何物(なにもの) 175「何人」とあるのに従う。但し、39「舍利出テ御坐セスハ何ニ」の「何ニ」は、「いかに」の例と考えられること、及び、〔今昔〕では「汝ハ此レ何ナル者ノ何レノ国ヨリ来レルゾ」、〔宇治195〕では「これはいかなる者ぞ」とあることなどから、本例も訓釈の如く「いかなるもの」とも読めよう。因みに、本集では、人を意味する「もの」に、「物」「者」の両方が用いられている。
- 21 申云(まうしていはく) 複製本では、「云」の左に「、」が見え、研究は「あるいは云々と読むべきか」とするが、原本によると濃い汚れである。
- 尺迦牟尼仏(さかむにほとけ) 尺迦牟尼仏ケ〔法華百座, ウ330〕, 尺迦牟尼ほとけ〔梁塵秘抄66〕, サカミタノカホ〔極楽願往生歌5〕但し、〔足利本法華経〕には「しやかむにふつ」が頻出する。
(参考文献) 武山隆昭「平安時代の『——仏』の読み方」(平安文学研究54所収)

- 22 衣モ躰（ころものすがた）「モ」は捨仮名、「躰」の読みは、同行に「躰スカタ」とあるのによる。訓釈「ころものてい」
- 23 坐テ（つみして） 中島本「すゑて」、訓釈「つみして」 訓は〔凶書寮本名義抄229〕、〔前田本字類抄、サ部置字・黒川本字類抄、ツ部人事〕による。又、〔教行信証六末92〕には次下の用例がある。
「源空法師・并ニ門徒数輩・不_レ考_レ罪科_レ 猥_レ坐_レ死罪ニ」「空師・并ニ弟子等坐_レ諸方ノ辺州ニ經_レ五年ノ居諸ヲ」(声点省略)〔今昔〕は「獄禁シテ重ク可誠キ也」とする。但し、30「此居ラレタル天竺ノ僧」という叙述は明らかに23行以下に対応する表現であること、及び、〔宇治〕は、24行相当箇所が「人屋にすゑられぬ」となっていること等によって、中島本のように「すゑて」と読むことも出来よう。〔前田本字類抄、ス部人事〕に訓がある。しかし、本集では「居」が「すう」を表しており、本話の「坐」は二例とも「獄」と結び付いている点で特徴がある。
コロシムヘキナリ 懲_レ了〔高山寺本古往来78〕
- 26 本師（ほんじ） 本（平）師（上濁）龍（去）樹（平濁）菩（上濁）薩（入）〔浄土高僧和讃5〕
- 28 ヲホソラ 宇宙オホソラ〔伊京集〕
飛来給テ（とびきたりたまひて） 飛来り給て〔宇治〕
獄 門（ひとやのものん） 獄の門〔宇治〕
去ヒヌ（さりたまひぬ） 訓釈の説くように「給」の脱であろう。類例に、220「問フニ」、221「参ヘリ」が有る。
盗人共（ぬすびとども） 偷（平・去）兒_{トウ}ススヒト〔前田本字類抄、ヌ部人倫〕、〔名義抄、僧中14〕は「ヒ」に上濁点を打つ。
- 29 虚空（おほぞら）〔西方指南抄、上本10〕には「虚空ニミツ」とある。本例も「こくう」と読むべきかも知れず、〔今昔〕では「コクウ」と読ませてある。しかしながら、28「ヲホソラ」と、この「虚空」とが同語であることは、〔今昔〕では共に「虚空」と表記されていることによって判る。そこで、28「ヲホソラ」に合せて、こども「おほぞら」と読むことにする。〔広島大学国語学研究室蔵八字文殊儀軌262〕に「虚^{ホソツ}の中の路を浄治して」とある。〔名義抄、法下94〕の訓も同じ。尚、〔元亀本運歩色葉集〕に「虚空（ソ濁）」とある。金（色）（こがねいろ） 原本によれば、「色」の終画らしい曲線が見える。〔今昔〕「金ノ色ナル人ノ」、〔宇治〕「金の色したる僧の」
- 30 放ルカ（はなちたるが） 光をはなちたるが〔宇治〕による。訓釈「はなてるが」

<第三話 仏舎利事> 33行~47行

- 33 護国（ごこく）〔今昔6の4〕は「胡国」とする。どちらも「呉国」を指す宛字。〔今昔(=)60ページ頭注2〕参照。
- 34 御坐ヤ（おはしますや） 71「此ハタレカ御ワシマスソト、問ハ御尾ノ明神ノ御坐也ト云」に従う。訓釈「おはすや」
- 36 国王（こくわう） 國王といひ〔自行三時礼功德義59〕
- 37 具シ奉セス（ぐしぶせず） 供奉クフ〔黒川本字類抄、ク部置字〕、また、〔前田本字類抄、カ部官職〕に「奉（平濁）膳（平濁）同内膳司」とある。
- 40 七日（なぬか） 七日〔法華百座、ウ19〕
- 41 紺璃_レ 琉（こむるり） 底本右傍の「レ」は反読符号。この種の反読符号を付した訂正は9例

- を数える。〔今昔〕の「紺瑠璃ノ壺ヲ机ノ上ニ置テ」に従い、「の」を挿んで読む。〔源氏物語、若紫167（源氏物語大成）〕にも「こんりりのつほとも」が有る。
- 札（つくえ）「机」に通じて用いられた。因みに、歴史的仮名遣で「つくゑ」とするのは誤り。平安時代初期訓点資料に「ツクエ」「ツキエ」の用例が有る。
- 43 切ニミテ（しきりにしきりて）〔今昔(三)344ページ頭注補記〕参照。尚、同趣の表現は、本集に次のように見当る。49「空イヤ晴ニミテ」 49「イヤテリニテリ倍ル」 186「只癒ニミテ以イク」 196「方フキニ方フ（キ）テ」 251「夜ハ只明ニミ」 316・320「ウメキニノミウメキテ」 337「只肥ニミ」
- 六日（むゆか）七月六日〔古今私秘叢（秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 資料篇』777ページ所載の写真）による。〕
- 44 明朝（あす）〔名義抄、仏中138〕によるが、〔黒川本字類抄〕では「ミ部」にも掲げられているから、「みやうてう」と読むことも可能であろう。
- 琉璃ツホ（るりのつほ）かりのこ るりのつほ〔陽明文庫蔵三卷本枕草子18ウ（陽明叢書）〕
- 45 丸白玉（まるなるしろきたま）〔黒川本字類抄、マ部辞字〕に「丸」が有る。また、〔陽明文庫蔵三卷本枕草子41ウ〕に「大きなるまつの木などの・二三尺にてまるなる・いつゝむつほうほうとなけいれなとすこそいみしけれ」の例も有る。〔今昔〕は「丸ナル白キ玉有リ」とある。訓釈「まとかなる」、〔今昔〕の訓も同じ。
- 47 安持（あんち）「安置」の「置」を連濁して読んだところからの誤記。連濁の証を挙げる。〔安田八幡宮蔵大般若経巻395〕に「安置（上濁）」、〔教行信証六98〕に「安置（上濁）」とある。

<第四話 静観僧正事> 48行～59行

- 50 蔵人頭（くらうどのかみ）「蔵人」については、〔高山寺本古往来372〕に「君達蔵人如^{かん}雲^{クラウト}」集^ク」、〔自行三時礼功德義7〕に「蔵人大夫孝道」、〔最明寺本宝物集13オ〕に「十人蔵人」などの例が有り、〔黒川本字類集・頓要集・易林本節用集〕などは「クラウト」又は「クラウド」、〔印度本系節用集・春林本下学集・伊京集・明応本・饅頭屋本・黒本本・天正十八年本各節用集〕は「クランド」となっている。又、「頭」については、〔前田本字類抄、カ部官職〕に「頭^同用語寮」とあって「カミ」と読むことが示されている。〔源氏物語、行幸897〕には「くらひとのとう」が見え、降って、〔日本大文典（土井忠生博士訳本 P. 749）〕に「Saconno Curando no Cami（左近蔵人頭）」が有るが、今は、〔字類抄〕に従って読んでおく。
- トサマカウサマニ ヘボン〔和英語林集成、三版〕に到っても「サ」は濁っていない。
- 53 目ヲヒシキテ 冥目無恨（「冥」の紙背に「ヒシクト云トモ」）〔石山寺本金剛波若集験記5〕、閉目信手（「閉」の紙背に「ヒシキ」）〔天理本金剛波若集験記28〕、目ヲ冥イテ〔而〕坐リ。〔大慈恩寺三蔵法師伝永久四年点巻五419〕「キ」が濁音であることは〔名義抄、仏中65〕に明らかである。
- 54 公卿（くぎやう）大臣公卿〔最明寺本宝物集42オ〕、また〔元龜本運歩色葉集、ニ30〕に「公卿（キ濁）」とある。なお〔法華百座総索引、補註、ウ165〕参照。
- 坐テ（ゐて）文脈及び〔名義抄、法中67〕により読む。訓釈「をりテ」。なお、原本を見るも「公卿」の右下は虫食いのため判読できない。
- 55 春花門（するんくわもん）春（平）興殿、春（平）華（平）門〔前田本字類抄、ス部地儀〕因

みに、〔安田八幡宮蔵大般若経巻559〕に「^{ミレ}春(平)時」、〔和泉往来58〕に「^{ミレ}三春」、〔西方指南抄、中末49〕に「^{サムシヨシイフソノノキツ}三春何節哉」などが有る。なお、〔宇治20〕は「美福門」とする。如是(かくのごとく) 原本によれば、「如」の下に「カ」、「是」の下に「ク」が隠れている。しかしながら、「如是」を「カク」と読むのは当たらないであろう。若しそのように読むのならば、わざわざ漢字に改める必要が無かったであろう。

- 56 上サマニ。登立ル 「。」は「立」を補入する記号と見る。「立」字は原本を見るも判然としない。「去」字が隠れているようである。また、「立」の右に返点らしいものが見えるが、明瞭とは言えない。しかし、「たちのぼる」以外に読みようが無からう。

左右手(さうので) サウナク・ウケタマハリ・候マ、ニ〔西方指南抄、下本93〕、^{コノ}条・^ナ左右ニオヨヒ候ハス〔同、下末191〕、オモハム・人ニオキテハ・^ナ左右ニ・オヨフヘカラス〔同、下末63〕 訓釈「ひだりみぎので」

- 57 マナカミ 〔三昧院本日本靈異記中一(日本靈異記諸本訓釈索引)〕に「マナカヒスヘクチヒソウ(嗔喊)」が有る。〔名義抄、仏中51〕に「マナカミスハル」が有る。語義については訓釈を参照のこと。

香呂(かうろ) 51・52・56「香炉」、378「香呂」。〔御所本宇治拾遺物語(複製)〕に於いても、「香炉とりくひりて額に香炉をあてゝ(中略)香呂の煙空へあかりて」の如く、「香炉」「香呂」が併用されている。因みに〔西方指南抄、上末51〕に「^{ミツカ}自ハ^{カク}香呂ヲトリテ」とある。

- 58 カキ闇テ(かきくれて) 〔名義抄〕では、「肝・喃・晏」などに「クル」の訓が与えられている。〔源氏物語、須磨435〕に「にはかに風ふきいてゝそらかきくれぬ(中略)ひちかさあめとかふりきて」と有り、打聞集の場面と、よく似通っている。

- 59 僧都(そうづ) 僧都^{ソウツ}_{大少}〔黒川本字類抄、ソ部官職〕

<第五話 三井寺事> 60行~76行

- 61 此寺ノ^テ底 寺ノ^テ躰ヲ見ニ〔今昔11の28〕、本集66「僧^テ躰」〔前田本字類抄、テ部人躰〕に「躰(上濁)テ(上)イ(上)」とある。

- 62 石管(いしづつ) Izzutçu. Bocal do poço(井戸の縁)〔日葡〕により、「ツ」を濁る。因みに、「管」を「タケノツツ」と読んだ用例が有る。「^{チヒサキ}微^{タクノツ}管^{タクノツ}浅智也」〔中山法華経寺蔵三教指帰注、12ウ〕

- 63 今堂(こむだう) 291・293「金堂」

- 65 鯉^{フケ}〔今昔〕には「鮒」とある。

- 68 此寺立給ル(このてらたてたまへる) この個処の読み方には問題が有る。訓釈は「このてらのたちたまへる」、中島本は「このてらたてたまへる」とする。ここはおそらく、61「大友ノ王子ノ立給ル寺有」と照応しあうのであろう。あるいは、「此寺立給ル」と「歳」との間に脱落が有るか。〔今昔〕は「大師ヨリ外ニ可持キ人無し。我レ、年老テ心細ク思ツル間」とある。

- 70 守^{マカフ}ト(まばらうと) 「ウ」は助動詞「む」が〔mu〕→〔m〕→〔n〕→〔u〕と転じた形。本集に見られる近代語の兆の一つ。なお訓釈が「ホは清音のようである」と言うのは、何かの間違いであろう

契^{チキ}テ 複製本では、「キ」の下に点らしきものが見えるが、原本によれば墨の汚れである。「チ

キテは促音便無表記と見る(訓釈)。同様例が309「縛シハテ」、329「アテ」と有る。
不審ケレハ(いぶかし——) 365「不審シ」〔教行信証三157〕に「欲^キ見^ミ父ノ王^オヲ^ハ不^フ審^シ」
と有る。「フ」は〔名義抄, 法上64〕によって濁音であることが判る。

- 71 タレカ御ワシマスツトハ問ハ 「カ」は主格助詞「が」の例。「ハ問ハ」の「ハ」は、上の「ト」の踊字であると同時に、「問」の訓の第一音節を示す。導入仮名と言うべきか。123「ケニサハ候ナリ」の「サハ」も同趣の用例。
御尾明神 三尾ノ明神〔今昔〕
12 故 62行には「ユエ」とあり仮名遣いが混乱している。
ナマクサカリツルカ 「ク」は〔名義抄, 仏中114〕によって濁音とする。
76 唱也 「唱」は「昌」の誤りと見る中島本の説を採る。〔天理本三宝類字集, 上93オ〕に、「昌音倡サ(上)カ(上)リナリ」とある。

<第六話 大師投五胎給事> 77行~103行

- 77 弘法大師(こうぼうだいし) 弘法大師〔最明寺本宝物集4オ, 元亀本運歩色葉集, 二54オ(ホ・タに濁点)〕とあるのに拠る。但し, 〔法華經單字〕に「弘クウ」, 〔法華經音訓〕に「弘ク(上濁・去濁)ヒロム」, 〔西方指南抄, 上292〕に「弘願」, 〔皇太子聖徳奉讃12〕に「弘(上濁)興(平)」, 〔易林本節用集, ク部言辭〕に「弘通一法一宣」, 〔同コ部人倫〕に「弘法」とあるところよりすると, 普通語としては「グ」または「グウ」であり, 諱には特別の呼び方をしたのであろうか。
惠果阿闍梨 「ケイ」は合拗音「クエイ」の直音化したもの。小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」107ページ参照。
五古(ごこ) 「古」は「𪛗」の省文。〔前田本字類抄, コ部雑物〕に「五(去濁)𪛗(平)コ(上)ハ(平)」とある。
78 日本方(やまどのかた) 日本此云耶麻騰〔日本書紀, 神代上〕に依り訓読しておく。但し, 次の如く音読も可能であろう。〔西方指南抄, 中末103〕に「震旦・日本ノ聖教」, 〔東本願寺蔵皇太子聖徳奉讃8〕に「東(去)方(上濁)日(入)本(平)国(入濁)」, 〔同30〕に「𪛗=日本国=」ところで, 「日本」をどう読むかは, 同時に「唐」をどう読むかとも関連づけられるべき問題であろう。親鸞の場合, 物名には「唐垣」〔西方指南抄, 中末25〕の如く訓読みの例も有るが, 一方, 「唐(平)朝(平)光(去)明(上)寺」〔尊号真像銘文広本60〕, 「唐ノナラヒ」〔西方指南抄, 上末66〕, 「唐人ノコトクナル人」〔同, 中本97〕の如く音読の例も有り, 国号は音読したものである。他方, 本集においては, 77・212に「モロコシ」と読仮名の付いた例が見え, 国号を訓読したものと推定される。それ故に, 「日本」及び304「日本国」をも書紀に従い訓読することにした。訓釈「にっぽんのかた」
80 真言宗弘メナト持テ(しんごんじゅうひろめなどおきて) 「宗」は連濁したものと考える。因みに, 〔日本大文典P.222〕に, 「真言宗(Xingonjū)」, 〔書言字考節用集, 言辭九下, シ部〕に「一言宗^シ密宗^シ」とある。「弘メナト持テ」は, 〔今昔11の25〕では「弘メ置給テ」とある。本集では, 「弘メ置ク」という複合動詞を前項後項に分割して, 助詞を介させた表現と考えられる。
81 伊都郷(いとのかた) 「伊」「都」には上声点がある。〔凶書寮本名義抄185〕に「郷サ(上)ト(上)」とある。
82 ツカヒ往テ 347「婦イカテ」に倣い, 「ツカヒイキテ」と読む。
鷹養(たかがひ) 訓は〔書言字考節用集〕に拠る。

- 85 タイマツラム。「タテマツラム」の音便形か。本集345, 土左日記, 大鏡にも見られる。
山中ニ(さんちうに)〔今昔〕には「山ノ中ニ百町許入ヌ」とあるから、「やまのなか」とも読めようが, 若しそうならば, 86「山中ノ中」という表現は有り得なかったのではなからうか。其の所, 〔今昔〕では「山ノ中ハ」とある。
- 86 タチ 訓釈は「ハチ」の誤りであろうとする。原本によれば, 「タ」の第二画の「フ」が格別濃く太い。しかし「フチ」でも意味が通らないから, おそらく誤字であろう。〔今昔〕では「山ノ中ハ直シク鉢ヲ臥タル如クニテ」とある。
峯タテノホレリ 〔今昔〕では「峯ハ立テ登レリ」とある。
- 89 竹林(たけばやし)〔足利本法華經第一軸602〕に「又十方かひにみちて・そのかす・たけはやしのことくならん」とある。「Taqebayaxi. Bambual ou canaueal. (竹林・または葦の群)」〔日葡〕但し, 〔温故知新書〕には「竹林」とある。
- 89 ソコ 二人称代名詞的用法の例。
ニフノ明神 〔今昔(=) 106ページ頭注〕参照。
- 90 失(うせぬ) 〔今昔〕に「高野ノ明神トナム申スト云テ, 失ヌ」とあるのに従う。訓釈「うす」。
- 91 開ツヽ(あけつつ) 開テク一門戸〔前田本字類抄, ア部辞字〕 訓釈「ひらけつヽ」。
- 93 ツヽヤミ〔落窪物語卷一, 73(古典大系本)〕「つヽやみにて, わらふわらふ, 道のあしきをよほほひおはするほどに」, 〔宇治30〕「空もつヽやみになりて, あさましくおそろしげにて, この山ゆるぎたちにけり」, 〔古本, 卷下47〕「又くやうの日のとらのときに仏わたり給に, そらつヽやみになりくもりて, ほしもみえねば」 〔今昔〕では, ここのところ「霧立テ暗夜ノ如クニテ」とある。
- 96 カフソリ(かうぞり)「カミゾリ」の転。〔名義抄, 僧上93〕に「剃刀カ(平)ミ(平)ソ(平濁)リ(平)」とある。「カミ」(髪)が「カウ」となった例には, 252「カウキハ」(髮際)が有る。訓釈は, 「カフ」は「カミ」が「カm」の音になっている表記であろう, と説くが従い難い。
- 97 水精(すいしやう) 水(平)精(上)俗〔前田本字類抄, ス部雑物〕 訓釈に「すい一」とするの³¹は仮名遣いの誤り。「すい一」が正しい。
御前(おまへ) 424「ヲマへ」に従う。
- 100 其ヨリ(以)後 「ヨリ」は原本で確認した。「以」は左上からの斜線によりミセケチ。
- 101 ヲリハ 訓釈には, 「現代語の『折には』と同様の言い方」とある。〔日本国語大辞典〕は, 「たまに, 時たま, 時折」の意の「折に」の例として, 松翁道話を引く。〔今昔〕には, 「山ニ鳴ル音有り, 或ル時ニハ金打ツ音有り」とある。
鐘ヲ打音, 鳥ノ音 「音」の読み方について記す。〔法華百座, オ354〕に「カネノコエヲキテユキテミレハ」とあるから, 訓釈の言う如く, 本例も「こゑ」と読むべきかもしれない。しかし, 「鐘ヲ打音」と「カネノコエ」とは, 異なる表現である点に問題が有る。暫く「かねをうつおと」と読んでおく。次に「鳥ノ音」については, 〔古今集535〕に「とぶとりのこゑもきこえぬおく山のふかき心を人はしらなん」の例が有るので, 本例も「とりのこゑ」と読むことにする。訓釈「とりのね」。
- 102 ニフノタカノヽニノ明神 「ニフノ」の「ノ」は口頭語的表現。〔今昔〕は, 「丹生・高野ノニノ明神」とする。「ニ」を「ふたはしら」と読むに就いては訓釈を敷衍しておく。「四(はし)ヲの如来有す」「唯独(は)シラ如来のみ」(春日政治『^{西大}金光明最勝王經古点の国語学的研究研究篇』254ページ)

103 ケフナル 「けうなる」(希有)と読む。398「ケウニ候」、352「奇有」

<第七話 老耆移他国事> 104行~145行

104 他国(たのくに) 139「他国ニ」(「ニ」は捨仮名)。「大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記」に「他国ニトフラハレハ」,〔足利本法華經,第二軸884〕に「たこくまでへんせり」の如く音読の例が有る。尚〔今昔〕では,「ホカノクニ」と読んである。又〔元龜本運歩色葉集,二56ウ〕の「他一人」により「ことくに」と読めるかも近れない。〔源氏物語,常夏834〕に「ことくに」が有る。しかし,本集には別に「異国」という表記も有り,こちらを「ことくに」と読むことにしたい。

105 孝シ〔法華百座,オ487〕に「ケウシツカフル」,〔足利本法華經,第七軸661〕に「ふもに・けうせす」とある。

朝ニ見テタニ不見程タニ 「タニ」の「ニ」は原本により確認。「不」は虫損で確認できず。〔今昔5の32〕では「朝ニ見テタニ不見^{ヌラ}」とある。因みに,本集には「スラ」も「ソラ」も見えない。〔今昔(-),補注234〕参照。

106 倍テ(まして) 「倍」が動詞「マサル」として用いられた例は,本集49「テリ倍ル」,「感病則倍^{マサレ}セリ〔於〕男子ヨリモ」(築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』P.460所掲の「医心方卷21天養点二オ6」による),及び〔名義抄,仏上3〕等に見られ,「マス」として用いられた例は,〔教行信証六末11〕に「倍ニ大キニ願悉怖畏^{マサレ}」が有る。本例は副詞であるから,その点で同一用法とは言えない。「まして」という語源意識の残存と見るか,あるいは訓仮名的用法と見るかであろうが,未だ詳かにしない。尚,副詞「まして」は漢文訓読語には用いられない。本集222「倍テ」参照。

玄カナル(はるか——) 訓釈を敷衍しておく。〔無量寿經優婆提舍願生偈註卷上43〕に「二事相ヒ玄^{ハルカナル}」が有る。

土室(つちのむろ) 〔今昔〕「土ノ室ヲ掘テ」

107 屋ノ人ニタニ(いへのひと——) 屋イエ〔撮壤集〕,〔文明本節用集〕も同じ。〔今昔〕は「家ノ人ソラ此レヲ不知ズ」。

二疋(にひき) 疋ヒキ絹等員〔前田本字類抄,ヒ部員数〕,〔宇津保物語,忠こそ227-5(古典文庫本)〕に「きぬ三十ひき」の例が有る。

108 祖子(おやこ) 祖オヤ〔黒川本字類抄,オ部人倫〕

兵^{イソナ} 如来の聖賢の諸の將^{イソナ},之(と)〔与〕共に戦フ〔龍光院蔵妙法蓮華經五②-15(大坪併治『訓点資料の研究』による)〕

109 カハル事ナム有ル 「有」は斜めに虫損が有るが原本により判定し得る。

ツフト(つぶと) 訓釈を敷衍しておく。〔今昔26の1〕「但馬ノ国ニシテ鷲ニ被取シ年・月・日ニツフト当タレバ」,〔同27の38〕「顔ヲツフト不見セヌガ恠キニ」。尚,〔今昔(四)477ページ補注〕に詳説されている。〔大鏡卷三122-2(古典大系本)〕「ふちつほのうへの御つぼねに^{ツフト}つぶとえもいはぬ打出どもわざとなくこぼれいで」,〔同133-13〕「みちのくにかみを^{ツフト}つぶとをさせたまへりけるが」

110 思めくラカシテ(おもひめぐら——) 「一カス」は口語的表現。(参考文献)石垣謙二「研究備忘」(『総索引付』P.30以下),吉田金彦「口語的表現の語彙『一かす』」(『国語国文』28巻4号),山田巖「院政時代の語法」(『岐阜大学学芸学部研究報告—人文科学—』2号),小林芳規「国語史料としての高山寺本古往来」(『高山寺本古往来表白集』所収)

申候ハムト云心ニハ 「心」字には大きい虫損が有るが,原本により第一画の一部と,最後の

二点の一線に書かれたのが確認出来たので、「心」と推定される。

- 111 ハカムナウ 「ハカモナウ」の相通と考える。「ハカ」の用例としては、〔後撰集641〕に「けふすぎばしなましものをゆめにてもいつこをはかときみがとはまし」が有る。訓釈は、「ハカリナウ」の撥音化であろう、とするが採らない。
- 114 ヲホキテ 117 「オホキ食ツ」。(参考文献) 岩淵悦太郎「打聞集に於ける語の釈義一二」(国文学誌要2巻8号)
- 115 御前ニ候ハ 「候ハ」の「ハ」は虫損がひどいが、原本により僅かに小点二個を認め得る。
- 116 仰給フ 「フ」には虫損が懸っているが、確認し得る。
- 118 ヲホク、フ このままでは、「多く食ふ」の意に取る他ないが、前出の岩淵氏によれば、「ヲホキクフ」とあるべきところを誤ったものでであろうと言われる。
- 119 本末定テ(もとすゑさだめて) 此レガ本末定メヨ〔今昔〕 本例の「テ」は訓釈の説くとおり、完了助動詞「つ」の命令形と見る。
進リ(たてまつれり) 訓は〔黒川本字類抄, タ部辞字〕による。
- 121 浮テ(うかべて) 水ニ浮ベテ見ルニ〔今昔〕 訓釈は「うけて」とするが採らない。
- 122 思得(おもひえつる) 今日ならば「考ふ」を用いるところを、本話ではすべて「思ふ」を用いて表現している。これもその一例である。因みに、本集に、364「カムカヘアクナル」、372「カムカヘイタス」が有る。
- 123 象(きさ) 象^{マツ}(平)(去)平声俗キ(上)サ(平)〔前田本字類抄, キ部動物〕,〔名義抄, 僧下108〕は「キ(去)サ(上濁)」と濁る、但し、〔和泉往来154〕に「白ク象出東ヨリ」,〔足利本法華経, 第六軸670〕に「しし・さう・こらう・やこ」とも有るから、「ざう」と読むことも可能であろう。訓釈「ざう」
- 124 手マトヒシテ〔宇津保物語, 俊蔭2-4〕に「ざえあるをのこども、てまどひをして、ひとくだりのふみもたてまつらぬに」,〔大鏡, 道長233-7(東松本)(秋葉安太郎『大鏡の研究上巻』による)〕「くるまともゝかち人も手まとひしたちさはきて」,〔今昔19の3〕「此レヲ見付テ手迷ヲシテ丸ビ下ヌ」
エ思得シ(えおもひえじ) 副詞「エ」と「得」とが二重になっている点に注意を要する。本集415「エ求不得テ」も同様例。院政・鎌倉期によく見出される。(参考文献) 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」131ページ。山内洋一郎『古本説話集総索引』23ページ
125. 何セムスル(いかがせむずる)〔今昔〕は「何が可為ベキ」とある。
サヽ候事 「ヽ」は「候」の訓の第一音節を示す導入仮名。上の「サ」は副詞。71註参照。
- 127 思得テクルハ 「思」と「得」との間に複製本では小さい点が見えるが、紙のしみである。「クル」について、本集では、「キタル」より「ク」が多い。来リ(69), 来ルソ(21), 来レリ(354), コシ(154), 来ニス(249), 来タリ(319), キタルソ(216), キテ(227・249), 来テ(108・376), キニタラム(262), キヌ(249), キヌヤ〜(219), クルハ(127), 出キヌ(187) ()は行を示す。
- 131 数ヲ以テ(かずをもちて) 39「ナニヲモチテカ」に従う。
- 132 遣ツ(つかはしつ) 144「遣ハスヘキ」に従う。
- 133 (悪) ヲホホケ 「悪」は虫損のため確認できないが、「悪」か「思」か以外には考えられない。ミセケチになっている。「ヲホホケ」は「ヲホロケ」の誤りであろう。〔今昔〕は「オホロケノ有オナラム者ハ」とある。尚、〔法華百座総索引, 補註オ121〕参照。
- 135 年来(としごろ) 年シ来ロ〔法華百座, ウ253〕,〔名義抄, 仏上80〕に「年来トシコロ」とある。但し、〔黒川本字類抄, ネ部疊字〕は「ネンライ」,〔高山寺本古往来96〕も「年ネン

来」とあるから音読も可能であろう。

- 136 大マウチ君（おほいまうちぎみ） 訓訳は、この例を根拠として、漢字書きの「大臣」をすべて「おほいまうちぎみ」と読んでいるが、問題が有る。いかにも、〔和名抄〕、〔名義抄〕、〔古今訓点抄〕等に、「オホイマウチギミ」の例が有る。また〔源氏物語〕には仮名書きの確例として次の一例が有る。「おほいまうち君にせんせられてねたくおほえ侍」（若菜上、1048—11）これは朱雀院から源氏への会話中に用いられているものである。「おほいまうち君」はここでは源氏を指す。次に、〔殿暦〕康和四年正月五日条に、「五日（略）次主上召余、其詞コナタニ、余余微音唯称、着円座、是執政座也余取御気色召左府。其詞左ノオイ左府同称円座に着、次余又召内府、其詞内ノオホイ同称又着円座、作法如常（略）」、また同じく十一月十三日の条に、「次主上召余、其詞コナタニ、余称唯、経篋〔子〕敷昇自額間、着横円座、取御気色、余召左府、其詞左ノ於ホイ、左府称唯着円座（略）」とある。（藤原照等編『記録古文書語彙抄』により、『大日本古記録』から引用）〔源氏物語〕の例と〔打聞集〕の例とは、共に主上の会話中に於て相手を呼ぶ語に用いられている点で共通しており、〔殿暦〕の例は、直接天皇の詞ではないが、藤原忠実が天皇の前で、天皇に代って大臣を召す詞であって、場面としては通じ合うと認められる。精査した結果ではないから、此は偶然の一致かも知れないが、〔源氏物語〕と〔打聞集〕とに見られる仮名書き例が、いずれも主上の詞に現れる所に注目せざるを得ない。一方、〔黒川本字類抄、夕部官職〕に、「大臣タイレン在左右内」、〔最明寺本宝物集14ウ〕に「大臣タイレン大納言」「関白クワンハク左大臣サダイシン頼通」「内大臣ナイタイレン左大将サダイシヤク教通」、〔同11ウ〕に「大臣タイレン等あやし見ていはく」、〔足利本法華経、第二軸1178〕に「こくわう大しん・せつりこしをあつむ」等の音読の例が有る。本第七話に限るならば、「大臣」をすべて訓読することも可能であろうが、第二話355「大臣公卿」を訓読することは無理ではあるまいか。〔最明寺本宝物集42オ〕の「大臣公卿タイレンクニキョウこれを見て」に従うのが自然であろう。〔黒川本字類抄〕が「公卿」を「夕部官職」に配していることでもある。以上の理由に因り、漢字書きの「大臣」は、すべて音読することにする。

140 今年八年（ことしはちねん）〔今昔〕には、「七十ニ罷余テ今年ニ至ルマデ八年ニ満ヌ」とある。

141 老人（おいびと） 144「老人ト捨」に従う。

- 142 昔ヨリ（むかしより）〔今昔〕に「何ナル事ニ依テ昔シヨリ此ノ国ニ老人ヲ捨ツル事有リケム」と有ることにより、「むかし」と読む。訓訳は、本集に「昔」を「イニシへ」と読む例の有ること、及び、本例は、138「イニシへ」以下を受けて言った言葉であること。この二点から「むかし」とは読まない、と説いている、しかし、後者の理由は必ずしも説得力を持たない。何故かと言えば、〔今昔〕では、「往古…」を受けるところに「昔シ」が現れているからである。次に第一の理由について考えてみよう。〔打聞集〕に於ては、「昔」字は24例を数える。その内、

- (1) 話の冒頭にあるもの19例
- (2) 話中の文頭にあるもの2例
- (3) “ 文中にあるもの3例

となる。(1)の例は、〔今昔〕の「今ハ昔」に相当するものとして「むかし」と読むのが妥当であろう。又、(2)の例も、それに準じてよかろう。(3)の例の内、367「昔」だけに「イニシへ」と読仮名が付けられている。但し、この例は、〔今昔6の2〕に於ては「古ヨリ術競ヲシテ」となっている所である。「昔」字を「いにしへ」と読み得たことは、〔前田本字類抄・名義抄〕に徴して明らかである。しかし、〔前田本字類抄、イ部天象〕に於ける「イニシへ」同訓字の配列では、「古」が第一位で「昔」は第十位（最末）である。反面、〔ム部天

象(黒川本)に於ける「ムカシ」同訓字の配列では、「昔」が第一位で「古」は第八位である。この事から推測するのに、筆者栄源の用字意識に於ても、「昔」は「むかし」と読むのが常用態であって、「いにしへ」に「昔」を当てておくことに、何らかの抵抗があったのではないかと思われる。〔今昔〕に「古」とある所からも、以上の推測が可能であろう。このように考えれば、「イニシへ」と読仮名を振ったのは特例と考えられる。以上の理由に因り、他の二例は「むかし」と読むことにする。(参考文献) 峰岸明「今昔物語集における漢字の用法に関する一試論〔1〕」(国語学84)

- 143 然ハ(しかれば) 本集には、「サリ」系「シカリ」系共に見える。324「有様ハ然ト云ケレハ」、349「銭ハ然ト也」などの例から、ここは「しかれば」と読む。訓釈の説くように「されば」とも読めようが、本集では、「されば」に限らず「サリ」系の語詞は仮名表記する傾向が見られる。「サレハ」7例、「サレハコソ」2例、「サレト」1例等である。

<第八話 鳩广一仏盗事> 146行~166行

- 146 切利天(たうりてん) たうりはたうときところなり〔梁塵秘抄204〕,〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙劬信記270〕に「切利天ニウマレヌ」とある。
 優頭王(うでんわう) 于闐(テ濁点)王文珠之脇士也〔元龜本運歩色葉集,ニ27〕
 梅檀(せんたん) 梅(去)檀(平濁)赤者牛頭一〔前田本字類抄,セ部植物〕
- 148 人ヤ追テ 複製本では、「ヤ」の左傍に踊字の如き点が見えるが、原本によれば紙のしみである。色もやゝ茶色がかっている。
- 151 寿(いのち) ハシメハ・寿長シテ〔西方指南抄,上末48〕,〔名義抄〕にも見える。
- 153 〔王〕ウシ国(きうじこく) (光長寺本宝物集8ウ)には「龜茲国」「龜茲国」の両様が見える。尚,〔法華百座総索引,補註オ265,今昔(ニ)63ページ頭注〕参照。
 去方モ(さりしかた) 複製本では、「去」字に、虫損の線があたかも何かの文字が絡んでいるように見えるが、原本によれば、「去」を確認し得る。
- 159 伝ヘサセム (今昔6の5)には、「此ノ仏ヲ震旦ニ伝ヘテム」とする。この方が意味が通じ易い。
- 160 戒(かい) やふるかいはおほからめ〔源氏物語,手習1999-1〕
- 162 一夜(ひとよ) 大白神ヒトヨメクリ〔前田本字類抄,ヒ部人倫〕
- 163 男子(なむし) 男(平)(去)去声俗子ヲノコ〔前田本字類抄,ヲ部人倫〕
- 164 利益(りやく) 利益雑部リヤク〔前田本字類抄,リ部疊字〕
 法華経(ほふくゑきやう) 法(入)華(上)寺家部ホフクエ〔前田本字類抄,ホ部疊字〕,〔足利本法華経,第八軸272〕には、「よくほくゑきやうを・しゆちすることあらん物」とある。尚〔法華百座総索引,補註オ10〕参照。
- 165 ウツシ造 複製本では「ツ」「シ」の辺りに汚れがあり、不鮮明であるが、原本によって確認し得る。

<第九話 玄奘三蔵心経事> 167行~199行

- 167 玄奘三蔵 クエンシヤウサムサウ〔浄土和讃,ニ〕
 仏法アリトテ(ぶつほふ) 「ア」字の上半分に虫損が有るが原本により推定し得る。
- 170 音ヲサケテ(とゑをさくげて)〔栄花物語,本巻25(古典大系本)〕に、「おとど御声をさくげて泣きのくしり給へど、何のかひかあらむ」の例が有る。

- 171 此心経ハ(このしむぎやうは) 191「心経是也」に続く。
 此伝ヘタテマツレル様ハ この文脈は 190「トテ伝ヘ得タテマツレル」に続く。
- 173 鳥獸ノ(とりけだもの) 訓釈は「とりけもの」と読んでいるが、〔法華百座オ332〕の「鳥ケタモノ」に倣うことにする。尚〔今昔(補注)335〕参照。
- 174 死人(しにびと) 死亡者〔岩崎家蔵皇極紀, 元年五月〕, 〔かげろふ日記(伊牟田経久『かげろふ日記総索引』112-3)〕に「かたはらにしに人もふせり」が有る。〔今昔6の6〕では「死セル人」と読んでいる。
- 176 シミサウ 浸淫瘡心(平)ミ(去)サ(上)ウ(上)俗〔前田本字類抄, シ部人躰〕, 〔前田本和名抄2の39オ〕に「心美(去)佐(上)宇(上)」. 但し, 〔名義抄, 法下128〕には「浸淫瘡シ(平)ム(平)ミ(平)サ(上濁)ウ(上)」の如く, 「サ」が濁音になっている。訓釈「シミザウ」
- 177 父母(おも) 呉音読みしておく。〔教行信証528〕に「父(平濁)母(平)」, 〔温故知新書〕に「ブモ」と有る。但し, 〔法華百座〕には, 「父フ母ホ」(ウ22), 「我カ父チ母ハ」(ウ23)も有る。訓釈「ちちはは」
- 178 死モヤラ天(しにもやらで) 「天」は初め「ス」を書き, 上に重ね書きしたもので, 「ス」の第二画が「天」の終画と重なっている。
- 179 医師(くすし) 医ク(平)ス(上)シ(上)〔名義抄, 僧下57〕, 但し, 親鸞の真蹟本を見るのに, 〔西方指南抄, 上本102〕には「イシ」, 〔西本願寺本唯信抄94〕には「クスシ」の如く両方が有る。
- 180 嗅ニタヘテ(くさきにたへで) 「嗅」は「クサキ」とも訓める。〔今昔〕は, 「嗅キ事」で一貫している。176「嗅サ」に準じて「くさき」と訓む。
- 182 袂^{スツハム} 訓釈の説く如く「扱」の誤字であろう。〔前田本字類抄, ス部辞字〕に拠る。
- 183 泥(でい) うたゝうるへるつちをみ・ついにやうやくていにいたりぬれは〔足利本法華経, 第四軸615〕尚〔今昔(補注)404ページ〕参照。
- 185 ネフ^ル 「ル」は虫損のために確認できない。しかし, 僅かに残っている墨からは「ル」か「レ」以外には考えられない。
- 186 咄り下 詆^{神尔反}ネ(平)フ(上濁)ル〔天理本三宝類字集61オ〕
- 189 見ツルナリ(あらはし——) 見ア(平)ラ(平)ハス(平)ル(平)〔天理本三宝類字集90ウ〕
- 192 貴テ(たふとみて) 訓釈は「たふとびて」と読むが, 143「貴ムヘキ」に従い, 「たふとみて」と読む。
- 193 法門共(ほふもんども) 正しくは「法文共」とあるべきところ。以下同様の例が続く。「法文」は〔梁塵秘抄〕や〔法華百座〕にも見える。又, 「法門」とあるべきところを「法文」とした例も, 〔法華百座〕に有る。尚, 〔法華百座総索引, 補註オ108, オ372〕参照。
- 194 物共シ尽セス 「シ」は副助詞と見る。訓釈は「動詞であろう」と言うが, 採らない。
 鍋(かなへ) 〔今昔(補注)361ページ〕参照。〔前田本字類抄, カ部雑物〕「カナヘ」の第二位にこの字が有る。
- 197 龍王(りうわう) 無量の・諸天・りうわう・やしや〔足利本法華経, 第四軸447〕
 用スル(ようする) 〔名義抄, 仏中136〕によれば, 「用」には「ユウ・ヨウ」の二音が有る。例えば〔教行信証六本105〕には, 「如^{シヤ}麝^{カク}(上濁)香^{ノヂ}(上)後^{ユウ}有^{ユウ}用^{ユウ}(平)云々」とある。〔打聞集〕所用の「用」は, ここだけであって, 「ゆう」と読むことも出来よう。しかし, 文意からすれば, ここは「要す」でも不適當とは言えぬようであり, あるいは, 「エウ」と「ヨウ」との混同の結果, 「用」字にしたのかも知れないと推断し, 〔今昔〕の

表記をも参照して、「ヨウ」と読むことにする。〔今昔〕は次の如くである。「若シ、此ノ船ニ龍王ノ要スル物ノ有ルカ。然ラバ其ノ驗シヲ可見シ」(参考文献)小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号3)108ページ以下

- 199 ホウソウノ大ソウ 「ホウソウ」については、次の例が参考になる。「法相宗ノ・祖師ナリ」〔西方指南抄, 上本42〕, 「天台・法相等ノ・諸宗」〔同43〕, 又, 「大ソウ」については、次の例が参考になる。「モロ、ノ大(平濁)乗(去濁)ノ修(上)行(平濁)」〔東本願寺蔵唯信抄断簡三〕, 「大(平濁)乗(去濁)ノ法ヲ信シ」〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勤信記159〕。尚, 〔今昔〕には, 「法相大乘宗ノ法未ダ不絶ズシテ盛り也」とある。

<第十話 宝志和尚事> 200行~207行

- 200 書(傳)止トテ 「傳」は左上からの斜線によりミセケチ。訓釈「僞」とするのは誤り。
画師三人(あしみたり) 初め「画師ヲ」と書き。「ヲ」を「三人」に改めている。「三人」の読みについては, 〔観智院本三宝絵上・11話〕「昔国王有キ三人リノ王子有キ」に倣う。
- 201 遣ケル(つかはしける) 「ケル」は連体形終止法の例。
一人テ(ひとりで) 「テ」は「ニテ」の「ニ」の省記されたものとも考え得るが, 「ニテ」の変化形, 格助詞「デ」と見る。本集348にも同様の例が有る。院政期には, 他にもその例が有る。〔三教指帰注33ウ〕に「長者ノ万燈ハ小乗ノ智力テケス貧女カー燈ハ大乘ノ智力ニテ発タル」とある。(参考文献)山田巖「院政時代の語法」, 小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」,
守(まぼり) 本集の仮名書き例には, 「マモル」1, 「マホル」3が有る。連用形は二例とも「マホリ」とあるので, こどもそのように読む。
- 202 法服(ほふぶく) 被(ヒ)ニ(平)著(著)入濁)法服(入濁)〔教信証六本104〕, 〔伊京集, ホ部衣服〕に「法服」, 〔天正本節用集, ホ部財宝〕に「法服」, 〔日葡〕に「Fôbucu. Vestido de Bôzos, ou religiosos…(僧又は修道士の衣服…)」とある。
- 203 出対給(いであひたまひ) 347「人対テ云様」, 〔竹取物語43オ(十行古活字本)〕に「御つかひに竹とり出あひてなく事限なし」とある。訓釈「いでてあひ」とするが採らない。
- 205 大指(おほゆび) 指オ(平)ホ(平)ユヒ大一同〔名義抄, 仏下本39〕

<第十二話 不空三蔵験事> 208行~213行

- 208 宇多院(うだのみん) 「の」を入れて読むについては, 次下の用例を参考にした。号後鳥羽院〔教信証六末91〕, 高倉院御宇〔西方指南抄, 中末41〕, 華山院前右大臣家〔同中本105〕, 六条新院, 高松院, 建春門院, 九条院〔最明寺本宝物集9オ〕, 待賢門院兵衛〔同9ウ〕, 花山法皇〔同12ウ〕, 後一条院の位の御時〔同37オ〕
年人・利人(としひと) 藤原利仁のこと。〔今昔〕344ページ)参照。「年人」や212「利人」は打聞き書き故の誤記か。
- 新羅(しらき) しらきかたてたりし持仏堂の〔梁塵秘抄325〕, 〔凶書寮本名義抄170〕に「之(平)良(平)岐(平)古(平)度(上)」〔前田本字類抄, シ部雑物〕にも「シラキコト」とある。但し, 「しんら」と読むことも出来よう。〔尊号真像銘文広本, 本83〕に「新(去)羅(上)国聖人(平)」, 〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勤信記72〕に「新(去)羅(上)国」, 〔最明寺本宝物集六ウ〕に「新羅おもひかへりて」などがある。
- 209 異国(ことくに) 〔高野本平家物語卷二, 烽火之沙汰94-8〕の「異国」に倣い音読するこ

とも可能であろう。第22話では「他国」と「異国」とが併用されており、且、その間に意義差も認められないが、「他国」は104に述べた如く「たのくに」と読むのが妥当と考えられるので、「異国」を「ことくに」と読むことにした。

- 210 調伏法(てうふくのほふ) 謀反の聲調伏の為に〔高野本平家物語巻六、横田河原合戦113〕
伴僧(ばんそう) 伴(去濁)僧(上濁)ハンソウ〔前田本字類抄、ハ部疊字〕、〔陽明文庫蔵三
巻本枕草子12オ〕に「心ちあしきころ・はんそうあまたして・すほうしたる」とある。訓
釈「ばんのそう」と読むが採らない。
- 211 結願(けちぐわん) 〔黒本本節用集、ケ部言語〕に従う。〔黒川本字類抄、ケ部疊字〕にも。
- 213 死ハ(しにしは) 〔今昔14の45〕に「利仁ノ將軍ノ死ニシ事ハ其調伏ノ法ノ驗ニ依テ也ケリ」
とあるのによる。

<第三話 〽睨〽事> 214行~222行

- 214 羅睨(らごら) そのときに・あなん・らごら・しかもこのおもひをなさく〔足利本法華
経、第四軸293〕
- 215 恒河沙(ごうがしや) 往(平)昔(入濁)恒(去濁)河(上濁)沙(上)劫(入)ニ〔浄土和讃
127〕
仏ノ御国 「ノ」は虫損で確認し難いが、辛うじて推定し得る。
- 216 汝父ノ尺迦牟尼仏(なむぢ、ちちのさかむにほとげ) 〔今昔3の30〕には「汝が父、尺迦牟
尼仏」とある。本集も「汝が父の」とも読めようが、本集に於て、「汝」に連体格助詞「ガ」
の付いた例が181、182(二例)、237の各行にあること、一方、連体格の「汝」に「ガ」「ノ」
等の助詞の省略された例が無いことから、ここの「汝」は、仏が羅睨羅に呼びかけた語と見
る。結論的には訓釈に同じ。
- 219 帰参給(かへりまるりたまふ) 「給」は初め「タリ」と書き、その上に訂したもの。
キヌヤへ この箇所を読み方には、従来、「キヌヤキヌヤ」(総索引付・中島本)と「キヌ
ヤキヌヤキヌヤ」(訓釈・研究)との二種が行われている。本例の踊字は、三字の踊字の古
態である「キヽヌヽヤヽ」の字間の「ヽ」と「ヤ」の下の「ヽ」とが繋がり、連綿体に成っ
た結果、あたかも二字の踊字の連綿体が繰返されたかの如くに見えるものであろう。前者の
読解に従う。但し、本集には、三字の踊字でも、二字の場合と同形の連綿体を用いた例もあ
る(168「タトルへ足ニマカセテ」)から、本例は古い形態の残存と見てよかろう。(参考文
献)中田祝夫『古点本の国語学的研究総論篇』605ページ以下、小林芳規「踊字の沿革統貂」
(広島大学文学部紀要27巻1号)同「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要
特輯号3)同「表記法の変遷」(現代作文講座◎所収)
- 220 問フニ(とひたまふに) 28「去ヒヌ」の註参照。221「参ヘリ」も同じ。
- 222 仏タニ(ほとけだに) 〔今昔〕では「清浄ノ身ニ在マス仏ソラ」とある。107「屋ノ人ニタニ」
の註参照。
- 他人(たのひと) 104「他国」の註参照。訓釈「ほかのひと」
- 異也(ことなり) 訓釈の説くように「ことなる」と読めば、「此ソ」との間で、係結びの法
則に合致するが、「也」字は、この時代は終止形「なり」の表記が普通と考えられる。(小
林芳規先生の御教示)
- 倍テ(まして) 〔今昔〕では「何況ヤ」とある。106「倍テ」の註参照。
- 子思(こおもふに) 〔今昔〕では「衆生ノ、子ノ思ヒニ迷ハムハ」とある。

＜第三話 龍樹芥隠形事＞ 223行～234行

223 龍樹芥(りうじゅぼさつ) 本(平)師(上濁)龍(去)樹(平濁)菩(上濁)薩(入)〔浄土高僧和讃5〕

俗(ぞく) これを「ただひと」と読み得ることについては、〔今昔4の24、頭注3〕参照。

但し、〔黒川本字類抄、ソ部人倫〕に「僧^{ツク}弥^天桑^門俗(略)」と有るところから、本例も「ぞく」と読むことにする。尚、「俗ニヲハシ時」は、「俗ニヲハシケル時」の「ケル」脱か。〔今昔4の24〕には「俗ニ在ケル時ニハ」とある。

隠形(おむがう) 本集に於ては、「陰」「隠」の区別がなされていない。読みは228「御カウヤク」(「御」は「隠」の宛字と見る)に従う。〔久遠寺本宝物集上4オ〕に「龍樹芥^{ツク}ノ陰形ノ法ソラ」とある。

224 ヤトリ木(やどりき) 「木」は清音。〔名義抄、僧下91〕に「寄生ヤ(平)ト(平濁)リ(平)キ(上)」と有る。〔日葡〕に「Yadoriki. Aruore que naturalmente sem ser exertada nace no tronco, ou ramo de outra. (接木されたものではなくて、自然に根株や他の枝に生えている樹)」とある。

影^{カゲ}ホシ(かげほし) 蔭^{カケ}干^{ホシ}〔節用文字、カ部疊字〕

225 学テ(まなびて) 〔今昔〕で「其ノ法ヲ習テ」、〔古本63〕で「そのほうをならひて」と有ること、及び〔名義抄〕で「学」に「ナラフ」の訓の有ることから訓釈はこれを「ならひて」と読んでいる。本集に於ける「学」字「習」字の用法を調べてみよう。何よりも先ず、328「仏法習学」に注目せねばなるまい。これは〔今昔(三)83-4〕では「習ヒ伝ヘテ」、〔宇治170〕では「ならひ伝へんとて」とあるが、本集の表記では、「習」と「学」とが別の意義と訓とを表したものと考えるのが自然であろう。他の例に目を転じてみよう。306「学也」は〔今昔(三)81-11〕では「習ヒ可給キ也」とあり、225の例に類似する。が、304「学タメニ」は〔今昔(三)81-3〕では「法ヲ求メムガ為ニ」とあって、表現が異り、167「学ヒ往」、193「学集」は、〔今昔〕には相当表現が無い。一方、「習」についてみると、77「習給テ」は、〔今昔〕には相当表現が無い。以上が本集の用例のすべてである。これらの用例から、本集では「ならふ」には「習」が用いられ、「学」とは区別されていたと考えられる。且、〔黒川本字類抄〕に拠れば、「ナラフ」(ナ部人事)には、「習」を第一順位に、「学」は第七順位に掲げられており(全16字)、「マナフ」(マ部人事)には、「学」を第一順位に、「習」は第九順位に掲げられている(全20字)ことも考慮に入れるべきであろう。

226 首(かうべ) 179「首^{カウヘ}」に従ふ。

王宮(わうぐう) 「宮」の音については、〔名義抄、法下56〕に「宮^一禾^{クニ}ミヤ^ウ」〔法華経单字〕に「宮^{ミヤ}クウ^(去)」〔足利本法華経、第三軸596〕に「くうてん(宮殿)」、〔同第五軸116〕に「りうくう(龍宮)」と有るほか、〔教行信証六末67〕に「王(去)宮(上濁)」、〔西方指南抄、中本5〕に「宮殿相」〔正像末法和讃10〕に「龍(去)宮(上濁)」、〔一念多念文意92〕に「東宮ノクラキ」、〔皇太子聖徳奉讃15〕に「上(平濁)宮(上濁)太(平)子(平)」などが見え、〔り〕韻尾の後で「宮」の連濁していたことがわかる。訓釈「わうきう」とするが採らない。

228 宮ノ中ニ(みやのうち) 「中」については、230・234「宮ノ内」とあるのに従い、「うち」と読む。本集には、338「内チ」、135「中カ」の表記例が有るから、「内」を「うち」、「中」を「なか」と読むことは疑い無い。又、その用例を見ても、

〔内〕 388(穴の)内チ、6・151心ノ内、10国ノ内、44・45琉璃ツホノ内、44・46ツホノ

内, 64(金堂の内), 108七日内, 115内ニ參テ, 140屋ノ内, 230・234宮ノ内, 299堂内, 410殿ノ内

〔中〕 25中ニ重罪アル物ヲラク所, 79雲中, 86山中ノ中, 87一本松中大ル, 114草ヲ中ニヲキテ, 117二ノ中ニ草持テ, 194此中ニ一ノ鍔アリ, 201三人シテ書中ニ, 299大師シ仏中ニ居テ, 300仏達チノ中ニイマスカリ, 315物食ル中ニ古ノ様ノ黒ハミタル物アリ, 319ケシキアルモノ中ニモリテ, 135中カ(=仲)吉ルベキナリ

の如く、一応は意義上の区別もなされているようである。さりとて、228及び230の「中」を「なか」と読んで、「宮ノ内」と別語とするのは機械的に過ぎよう。又、「なか」と読んで「うち」に同義と解することも可能であろうが、〔西方指南抄, 中本94〕に「聖人清水ノタウ口^{キヨリツ}中ニイレタテマツル」とある例、並びに〔名義抄, 仏上79〕に「ウ(上)チ(平)」とあることにも照して、「うち」と読むことにした。尚, 〔法華百座総索引, 補註オ209〕参照。

229 足カタ(あしかた) 「カ」は清音。〔陽明文庫蔵三卷本枕草子35ウ〕に「かゝる雨にのほり侍らは・あしかたつきていとふひんに・きたなくなり侍りなむ」とある。〔日葡〕に「Axicata. Pegadas, ou rasto(足跡, 又は, 点々と長くつづく跡)」

230 ハウニ ほうにといふ物むらはげ厳粧じて〔栄花物語卷19, 110—10〕, 〔箋注和名抄, 卷六, 28オ〕に「白粉俗云ニ波布邇」, 〔名義抄, 法下30〕に「白粉ハ(平)フ(上)ニ(上)」とある。本例は, 「フ」がハ行転呼により「ウ」に転じたもの。尚, 〔今昔(補注)508〕参照。
 罎^{フコノメ} 〔今昔〕では「此ノ粉ヲ蔣^{フコノメ}籠メツレバ」, 〔古本111ウ〕では「この灰を撒きこめつれば」とある。「罎」「籠」共に「こむ」であるから, 「マキ」は, 「罎」の読仮名と見るよりも, むしろ語を補ったと見た方がよくはないか。

足影(あしかげ) 〔今昔〕では「足ノ跡ノ顛ルニ随テ」, 〔古本111ウ〕では「足形の顛はるゝにしたがひて」, 訓釈では「あしのかたち」とある。しかし, 〔黒川本字類抄, エ部人倫〕に「影^{エイ}カケ^{形代也}」とあるのなどより, 「あしかげ」と読む。

232 ヒキカツキテ(ひきかつぎて) 〔今昔〕「御裳ノ裾ヲ曳キ被ギテ臥シ給テ」, 〔古本〕「御裳の裾をひきかつぎて」とある。〔前田本字類抄, カ部碎字〕に「潜^{カ(平)}ツ(平)ク(上濁)」, 〔名義抄, 仏中6〕に「潜^{カ(平)}ツ(平)キ(上濁)メ(平)」, 〔天理本三宝類字集19オ〕に「佩^{カ(平)}ツ(平)ク(上濁)」とある。

<第廿話 道文法師事> 235行~254行

235 弘^{フコノメ}田 「荒田」のつもりであろう。20「晋ノ史弘」の註で述べた如く, 合拗音の直音化及び開合の混乱が見られることであるから, 「弘」と「荒」との関係についても, 「弘」と「皇」との関係と同様の背景を推察することが出来る。即ち, 「弘」は「荒」の宛字と認め得る。振仮名「アラ」は意味を明示する為に傍記したものであろう。尚, 〔今昔4の35〕が参考になろう。次下の如くである。「今昔, 天竺ニ仏ノ御弟子, 一人ノ比丘, 道ヲ行クニ, 荒田耕ストテ老タル翁一人, 若キ男一人ト, 二人有リ」

イカツチ(いかづち) 本集には, 236・237に見る如く, 「電」字を用いている。〔興福寺本日本靈異記, 上巻第三〕も同様である。〔名義抄, 法下66〕では, 「電」には「イナツ(上濁)マ(平)イナツ(平)ル(上)ヒ(平濁)」, 「雷」には「イ(上)カ(上)ツ(上濁)チ(上)」(仏下末27「雷公」も同じ)として, 区別している。〔日本古典文学全集日本靈異記, 61ページ頭注〕参照。

236 打トテス(うたむ) 14「葬送セムトテスル」参照。

238 登ヌ(のほりぬ) 中島本「のほりぬ」訓釈「あげぬ」。本文は「我ヲ空ニ上タラハ汝カ子ト成

テ来ト云ケレハ翁子モ无リケレハクハラ以テ電ヲ桑ノ木ノ本ニカキヨセテ其桑木ヲ便トシテ空ニ登ヌ」とある。この文脈の理解としては、「翁」が「電」を「登ヌ」と取るのが素直であろう。そのように解することを前提とすれば、「登ヌ」の読みは必然的に訓釈の説に左袒することとなろう。ただ、一点疑問が存する。それは「ヌ」を完了の助動詞と見て誤りないとすれば、「ツ」との関係に於て、上接動詞に意味的制約の存することに注意せざるを得ない、という点である。今、仮に「のぼる」であるとすれば、〔源氏物語〕に於ては「ぬ」に接続するのみで、「つ」に接続する例の無いことは、夙に山崎良幸博士の示されたところである。（『古典語の文法』P.193）この関係は〔今昔〕に於ても同様に認められ、挙例に及ばないくらいであって、極めて例外的に「ツ」の接続する例が存する程度である。（『国ヨリ上ツルニ』巻24の19）一方、「あぐ」ならばどうであろうか。管見の用例をすべて挙げる。「童女波奈理波髮上都良武可」（万葉巻16, 3822）、「宇奈為放尔髮拳都良武香」（同3823）、「物ふみたてて<格子ヲ>あげつ」（落窪, 68—1）、「格子などあげつれど」（蜻蛉下, 172—12 <かげろふ日記総索引>）、「いまだならはぬに気もあげつべし」（宇治18）、「かんとちめにはわれしあれはけふあすといふはかりになしあけてむ」（源氏, 東屋1802—5）、「世のそしり、人のうらみも知らず、上なき位には、なしあげてまし」（夜の寝覚巻3, 208—9 <古典大系本>）、「狐の後足をとりて引あげつ」（宇治18）、「云フニ随テ引上ゲツ」（今昔巻5の21）、「狐ノ尻ノ足ヲ取テ引上ツ」（今昔巻26の17）、「引上ツレバ懸橋ノ上ニ居ヘテ」（今昔巻28の38）、「かせこそけにいはほもふきあげつへきものなれ」（源氏, 野分865—11）、「大納言寄テ車ノ籠持上ゲツ」（今昔巻22の8）、「己ハシモ吉ク持上奉テムカシ」（今昔巻28の20）以上の如く、「つ」に接続する例が殆どであって、僅かに、「三支上ゲニキ」（今昔巻12の21）、「台ヲ引寄セテ鏡ヲ持上給ヌルニ」（今昔巻28の23）を例外的に見出したに過ぎない。以上の調査の結果は、「のほりぬ」「あげつ」が当時一般の接続状況であったと判断されるのである。とすれば、本例も、「のほりぬ」と読むのが適切であろうと考えられる。ただ、その場合、「登ヌ」の主体は「電」となる故に、同一センテンス内で主語が変わることになり、異常感を伴うであろうが、これを口語文体の特徴の一つと認めることは可能であろう。因みに〔日本霊異記〕は、この辺り「即愛霧登天」とあって「電」が主語になっている。尚、〔前田本字類抄, ア部辞字〕「アグ」には第25位に「登」が掲出されており、合点は付いていない。一方、〔黒川本字類抄, ノ部辞字〕「ノボル」には、第一位に「登」が掲出されている。（註）本項の調査には公刊の索引類を利用させていただいた。一々挙げることを省略させていただく。

- 239 壊任（くわいにん） 「壊」字を諸書すべて「懐」とするが、原本によれば、242「怖テ」254「怖ケニ」の「忄」とは明らかに異り、「土」偏であることが認められる。〔法華百座ウ412〕に「懐任セルキサキ」が有る。尚、〔法華百座総索引, 補註ウ412〕参照。
- 241 元興寺（ぐわんこうじ） 訓釈は、中島本の「ぐわんこうじ」を根拠が無いとして却け、〔十卷本字類抄〕に従って「ぐゑむこうじ」（「む」は「ん」の誤り）と読んでいる。しかし、〔尊経閣蔵釈日本紀19の14〕には「元（去濁）興（上）寺（平濁）金（去）堂（上濁）」が有り、降って〔書言字考節用集〕には、「グハゴウジ」「グハゴウジ」と有る。「興」は連濁して「ゴウ」と読まれていた可能性が有るが、暫く〔釈日本紀〕に従っておく。「グエンゴウジ」も可。
- 242 鐘付人（かねつくひと） 鐘を撞く意の「つく」は、アクセントが「上平」（〔名義抄, 仏下本63〕、但し、〔仏上43〕には「上上」）であるが、物が付着する意の「つく」は「平上」（〔天

理本三宝類字集5ウ] 但し〔名義抄, 仏上7〕では「平平」)であって, アクセントの型を異にする. 従って, ここに「付」を用いたのは, アクセントを無視した宛字と考えられる.

- 243 年中(としなか) としなかに我がなげきはなりぬればよにみそぐともうせじとぞおもふ〔御所本三十六人集伊勢集29ページ〕 訓釈「としなかがろ」とするが採らない.
道丈法師(だうちやうほふし) 〔日本靈異記〕〔今昔卷23の17・18〕共に「道場法師」とする. 尚, 〔今昔 四 255ページ注〕参照.
- 244 初夜後夜(しよやごや) 初(去)夜(平)ショヤ〔前田本字類抄, シ部疊字〕, 後(平濁)夜(平)〔同, コ部疊字〕
行スル(おこなひする) 〔夜寝覚卷二182—12(古典大系本)〕に「萌黄だちたる帯を, はかなげにうちかけて, 行ひし給ひけるなめりと見ゆるを」とある.
- 246 イマシク 訓釈は「イミジク」. 中島本「いみじくの誤か」, 研究も「イマシクはイミシクの誤写であろうか」とする. 思うに, 「忌む」の形容詞形「忌まし」の連用形「忌ましく」ではあるまいか.
- 249 来ニス(こむず) 「ニ」は〔n〕を示すか. とすれば, 〔m〕〔n〕の混同例となる.
- 250 放レム(はなたれむ) 44・46「放ツ」に従う.
頭(かうべ) 訓釈は「かしら」と読むが, 179「首」に従い, これも「かうべ」と読むことにする. 〔前田本字類抄, カ部人体〕に訓が有る. もし「かしら」と読めば位相上の問題が生じよう.
ヒシクル(ひしぐる) 拉^ヒヒ(上)サ(上)ク(平濁)〔前田本字類抄, ヒ部辞字〕
シ(上)ク(平濁)
- 251 手迷ヒ(てまどひ) 124「手マトヒ」の註参照.
夜(よ) 「よる」とも読める. 〔法華百座〕に「ヨ」「夜ル」両方が有る.
- 252 カウキハ(かうぎは)「カミギハ」(髮際)の音便形. 〔前田本和名抄, 卷二, 23ウ〕に「髮際賀(平)美(平)岐(平)波(平)」, 〔前田本字類抄, カ部人体〕に「髮際カミキハ」, 〔日葡, 補遺〕に「Cõguiua. Toutiço do cauallo por onde vay ofrco(馬の首で, くつわ(手綱)の通る部分=日本語大辞典7)」とある. 訓釈は「ウ」は「ミ」の撥音化の表記であろうと述べているが従わない. 96「カフソリ」の註参照.
- 254 アノ 指示詞. 地の文の用例として注意.

<第壹話 玉盜成国王事> 255行~288行

- 255 以リケル(もたり——) 104「老母ヲモタリ」に従う.
- 257 着荘共(きかざれるども) 訓釈「きかざれるども」. 中島本は「著荘女共(キカザリタルヲムナドモ)の誤か」と言う. 「きかざれるども」は異様に思われよう. 〔栄花物語, 春8, 265—6〕に「髪上げたる女房, 若き人へのきたなげなきどもなれば」, 〔同卷11, 357—8〕に「その折の薫物などのいみじきどもの数を尽させ給へり」等の例が有るが, 本集の例とは構文が異なる. そこで, 261「目出キ女共」, 268「居並タル女共」などの表現から推断して, 中島本のように解することは理由が有ると言える. しかし〔栄花物語, 卷1, 30—11〕に, 「さてもこの御方々, 皆御子生れ給へるどもなり」の例が有り, 訓釈の読みの可能である事を知るのである.
- 258 男(をとこ) 〔法華百座ウ390〕に「男ヲトコ」とある.
楼上(ろうのうへ) 〔今昔5の3〕に「其ノ後, 蜜=搔テ彼ノ飴レル楼ノ上=将上テ臥セツ」とあるのに従う.

- 260 四角(よすみ) [今昔]は「四ノ角」とする。〔群書類従本日本靈異記, 上巻第三〕に「童子鐘堂之四角燈儲」の例が有り, 本集と用法を等しくする。〔名義抄, 仏下本9〕, 「角ス(平)ミ(上)」, 〔黒本本節用集, ケ部財宝〕に「四隅^{ヨソ}」とある。
- 261 イタ敷 板敷イタシキ〔前田本字類抄, イ部地儀〕, 〔元龜本運歩色葉集〕に「板敷イタシ(濁)キ」, 〔文明本節用集五一4〕に「板敷^{イタジキ}マシツキ」, 〔饅頭屋本節用集〕も同じ。〔今昔〕は「地ニ敷テアリ」とする。
- 262 遊戯ス(ゆけす) 遊戯^{人等部}_{ニケテ}^{道邊分}〔黒川本字類抄, ユ部疊字〕, 〔名義抄, 僧中39〕に「戯禾ケ(平)」とある。〔足利本法華經, 第二軸377〕に「くはんきしゆけして」の用例が有る。「け」は清音。
- 264 虚言(そらごと) ソラコト〔法華百座ウ247〕, 〔字類抄・名義抄〕共に「コ」に濁音の証は無いが, 〔伊京集, ソ部言語進退〕に「虚言」とあるのに従う。
- 267 ハカリ事(はかりこつ) 訓釈に従い, 「ハカリコト」の動詞化と見る。但し, 「コ」は清音, 〔天理本三宝類字集, 91オ〕に「規ハ(平)カ(平)リ(平)コ(平)ト(平)」とある。尚, 〔今昔(一)補注149〕参照。
- 269 度々(たびたび) タヒ〜キコシメストモ〔法華百座オ141〕, 但し, 〔前田本字類抄, ト部重点〕の「度々ト々」, 〔高山寺本古往来95〕の「度々ノ御下文」等によれば, 「ど々」とも読めよう。
- 270 イカサマニシテカ 終りの「カ」と次の「ハ」との中間に読点らしいものが有る。
成テ(なして) [今昔]に「一ツ心ニ成シテ謀試ム」とある。
- 272 内々(うちうち) 内ミウチ〜〔黒川本字類抄, ウ部重点〕
- 273 先年(せんねん) [前田本字類抄, セ部疊字]に「先年」が掲げられている。〔大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記183〕に「先(平)年(平)」とある。尚, 〔今昔(一)357ページ頭注30〕参照。
- 281 人間(にんげん) 人(去)間(上濁)^{人事部}_{ニンケン}〔前田本字類抄, ニ部疊字〕
イヲネサリシカハ 「イ」と「ヲ」の一部とが薄墨によって塗抹されたように見えるが, 汚れであろう。
- 285 説タル 「タル」は連体形終止法の例。〔今昔〕には「此レハ經ノ説也トゾ僧語リシ」とある。僧ノ語シ 「シ」は, 「僧ノ」の「ノ」に應ずる語法であって, 体言止めに準ずる。
悪事善事(あくじぜんじ) [今昔]では, 「悪シキ事ト善キ事トハ, 差別有ル事无」とする。但し, 〔今昔31の24〕, 「汝等監ニ箭ヲ放テ悪事ヲ至サバ」や, 〔自行三時礼功德義72〕「善事^{善し}をたくむを」の例も有るので, 音読しておく。
- 286 心得又物ノ、 「ノ」(ノ)は, 単文の主格の例。
并成ヘキニ非ス(ぼだいをじやうずべきにあらず) 中島本・訓釈が「并」(菩薩)とするのは抄物書きの誤認。〔今昔〕は, 「彼ノ央廬囉ハ仏ノ御指ヲ不切ズハ忽ニ道ヲ可成キニ非ズ」とする。〔一念多念文意98〕に「如来成道ノ素懐ハ」の例が有る。〔望月仏教大辞典〕「菩提」の項によれば, 「覺・智・知, 又は道と訳す」とある。又同じ項に, 〔菩薩地持經第一種性品〕より, 「若し菩薩種姓なくんば, 一切の諸の方便行ありと雖も, 終に無上菩提を成ずることを得じ」を引用している。尚, 「成」をサ変動詞として読むについては, 〔西方指南抄, 下末154〕に「マタ大事ヲ・成シタマヒシ・トキハ」の例が有る。
- 287 生死(しやうじ) 生(去)死(平濁)輪(去)転(平濁)〔教行信証二・142〕
- 288 善悪(ぜんあく) [前田本字類抄, セ部疊字]にこの熟字が収められている。

<第貳話 智証大師験事> 289行~294行

290 香水取 (かうずいをとり) [今昔11の12] には、この辺り次のようにある。「俄ニ弟子ノ僧ヲ呼テ『持仏堂ニ有ル香水取テ持来レ』ト宣ケレバ」〔元龜本運歩色葉集、一44ウ〕に「香水ス(濁)イ」とある。訓釈が「かうずい」とするのは不可。

向西方(さいほうにむかひて) 又・人ヲ勸テ・唾啼・便利・西方ニ・向ハス・行住座臥・西方ヲ背ス〔西方指南抄、上末53〕。訓釈「にしのかたへむきて」

291 戸 [今昔] には「其寺ノ金堂ノ妻ニ火ノ付タリツレバ」とある。「妻」は「妻戸」の略。〔今昔(三)86ページ注69〕参照。本例の付訓を「ツマド」の部分訓と見ることもできよう。

云々(うんうん) [黒川本字類抄、ウ部重点] により読み、連声の形に従わない。但し、〔西方指南抄、上本55〕に「清淨覺経ノ信不信ノ因縁ノ文ヲヒケリ」の例も有るので、既に「うんぬん」と連声化していたかも知れない。「云々」は本話3、第十七話2、第十九・廿五・廿六話各1、第廿七話7例である。他の説話集との比較により、主題とは緊密な関係を持たない付説部分が「云々」で処理されていることが、小林保治氏の論文「『打聞集』の特質と方法」(研究所収)に詳しく述べられている。

293 去年(さりとし) 去年〔高山寺本古往来26〕但し、次の如き音読の例も有る。「去年十一月十五日ノ夜」〔西方指南抄、中本101〕

頓(にはかに) 286「タチマチ」の傍訓が有るが、〔前田本字類抄、ニ部辞字〕「ニハカニ」には、「俄」に次いで「頓」が掲出され、且、合点が付せられている(全34字)。一方、〔黒川本字類抄、タ部辞字〕「タチマチ」には、第17位(全21字)に「頓」が掲出されていて、「頓」は「ニハカニ」を表す常用字であったように考えられる。ここは、〔今昔〕の表現に鑑みて「にはかに」と読む。「而ルニ丑寅ノ方ヨリ俄ニ大ナル雨降り来テ」

<第参話 慈恵大師験事> 295行~296行

295 帰了(かへりをはんぬ) 「了」は「をはりぬ」とも「をはんぬ」とも読める。例えば〔西方指南抄〕には、この両方が用いられている。

《をはりぬ》 隠タマヒ了(中本13), 入了(中本18), カクレ了(中本18), 被ニ殺害ニ畢(中末22), 逃隠畢(中末22), 死畢(中末25)

《をはんぬ》 誓願了(中末33), 死了(中末33), 来臨了(声点省略, 中末37), 信伏了(中末39), 定了(中末40), 勤行了(中末40), 被ニ行ニ流刑ニ了(中末44)

〔図書寮本名義抄99〕は「訖」を「ヲハヌ」と読んでいる。その他、「今年麦ハみなまいり候おはんぬ」〔平安遺文3762, 安元二年五月一九日〕, 「たしかにへゆつりおハぬ」〔同3466, 仁安三年六月二〇日〕, 「巳(ニ)畢(ン)ヌ」〔高山寺本古往来106〕, 「承リヲハヌ」〔同384〕などが有る。本集では、口語性を考慮して「をはんぬ」と読んでおく。

<第六話 慈覚大師入唐間事> 297行~328行

297 会昌天子(ゑしやうてんし) [今昔11の11] には「恵正天子ト云フ天皇ノ代ニ」, [最明寺本宝物集、5オ]には「会昌天子」と有る。

被宣下(おほせごとくださるれば) 「被」は尊敬助動詞「る」の例。

301 不成俗テ(ぞくになさずして) 「俗に成さずて」とも読めようが、204「誓始メスシテ」, 317「不知シテ」の如く、「——ズシテ」の用例が有るので、ここも「し」を補って読む。

302 追逃テヨ(おひにがしてよ) 「追」はミセケチのようにも見えるが、原本について見るのに、運筆上の墨跡らしく思われる。

逃シメ給 「シメ」は尊敬助動詞「シム」の例。

城(じやう) [梁塵秘抄204]に「たうりはたうときところなり(中略)なかにはきけんの
上たてり」, [足利本法華経, 第二軸879]に「ひとつのしやうにとゝまりぬ」などが有る。

[黒本本節用集, シ部天地]「城ジャウ」, [日葡]「Iō. Xiro. Fortaleza (城砦). Iōno
vchiye fiqi xirizoqu. Iōuo votosu. i, Xemevotosu.」

303 付キテ 「築」の宛字。但し, 「築」は「ツ(上)ク(平)」[名義抄, 僧上71]であるから,
「付」のアクセントとは異なる。242「鐘付」註参照。

304 礼相也(みだれにあへるなり) 「礼」字については, 複製本では判然としないために, 訓釈
は「秘」, 研究は「礼か礼の如き字形である。あるいは乱の誤写か」と述べ, 総索引付は
「礼」とする。原本に就いて見るのに, 「礼」以外には読みようが無い。しかしそれでは意味
をなさないようである。そこで, [打聞集], [今昔], [宇治]の本文を比較してみよう。

打聞集	今昔	宇治(170)
城高付キテメクリ堅門固タリ 一門アリ前ニ人立リ悦成テ問答 云一人長者家也和尚何人ソ答云 日本国ヨリ仏法学タメニ渡也 ⑦而如是礼相也暫安隠処ニカクレ テ有ト思也 ①此門立人云此所ニハオホホケノ 人不来極吉所也暫此ニオハシテ 事平後ニ出テ仏法学也ト云	城固ク築キ籠テ廻リ強ニ固メタ リ。一面ニ門有リ。其門ノ前ニ 人立テリ。大師是ヲ見テ喜テ寄 テ「是レハ何ナル所ゾ」ト問 フ。答テ云ク「是ハ一人ノ長者 ノ家也。聖人ハ何ゾ」ト。大師 答テ云ク。「仏法ヲ習ハムガ為 ニ日本ノ国ヨリ渡レル僧也。 ⑦然ルニ、仏法ヲ亡ロボス世ニ会 テ、暫ク隠レ居テ、忍ビタラム 所ニ有ラムト思フ也」門ニ立タ ル人ノ云ク「此ノ所ハ□テ人不 来シテ極テ静ナル所也。然レバ 暫ク是ニ在マシテ世ノ静ニ成ナム 後ニ出テ仏法ヲモ習ヒ可給キ 也」ト。	築地高くつきめぐらして、一の 門あり。そこに人たてり。 悦をなして、問ひ給に、「これ はひとりの長者の家なり。わ僧 は何人ぞ」と問ふ。答ていは く、「日本国より、仏法ならひ つたへむとて、わたれる僧な り。⑦しかるにかく浅ましき乱れ にあひてしばしかくれてあらん と思なり」といふに、「これは ①おほろけに人のきたらぬ所也。 しばらくこゝにおはして、世し づまりてのち出て、仏法も習給 へ」といへば、

上の如く三者の表現を比べてみるのに、⑦部では[打聞集]と[宇治]とがよく似ており、
①部でも、「おほろけ」という特徴ある語詞(打聞集「オホホケ」は誤写と考える)の使用
という点で、やはりこの両者が共通する。このように考察してみると、[打聞集]の「礼
相」は研究が提案しているように、「乱相」の誤記かも知れない、と思慮されてくる。今
は、以上の見解によって「みだれにあへるなり」と読んでおく。

安隠処(あんおんなるところ) 訓釈は「やすくかくるところ」と読んでいるが採らない。
中村元編[仏教語大辞典]には、「安隠」「安穩」の両方が登録解説されていて、意義にさ
したる異同は無いようである。[西大寺本金光明最勝王経平安初期点]には約32例の「安
隠」が有るが、「安穩」は見当らない。又、[龍光院藏妙法蓮華経古点]には、約23例の
「安隠」が有るが、やはり「安穩」は見当らない。(これは伊藤健君の調査による)。新し

く発見された〔新薬師寺薬師如来像納入妙法蓮華經平安初期点〕に於ても小林芳規先生の御教示によれば「安隱」の由である。更に〔法華百座ウ99〕に「現世安隱」の例が有り。又、〔教行信証六末6〕にある「大徳安穩ス衆生ヲ」の「穩」は、初め「隱」と書き、重ねて「穩」に訂正せられているようである。（あるいは、初め「禾」偏を書き、「𪛗」に訂したのかも知れない。）このように、「隱」が「穩」に通じて用いられたものようである。春日政治博士によれば、〔金光明最勝王經平安初期点〕の「隱」に「オイ」の傍記が有り、「イ」は「n」を表すと説いておられる。（研究篇50ページ）即ち、韻尾が「穩」と同じ舌内撥音である。又、〔同平安初期点〕には、次の如く、本集の例に似た用例も有る。「〔可〕〔於〕寂靜安隱なる処の所求の事を念フに心に離ルマジ〔不〕カラムトコロニシテス可シ」（巻7, 131—6）以上に述べたところにより、本例を「あんおんなるところ」と読むことにする。尚、〔足利本法華經〕の用例もすべて非連声形なので、それに倣うこととする。尚、〔法華百座総索引、補註ウ99〕参照。

305 此所（このところ）・此（ここ） ここで、325「其所」、325「彼所」、326「其」をも含めて述べておくこととする。まず、「此」「其」「彼」を「ここ」「そこ」「かしこ」と読み得ることは、次の例に照して明らかである。「〔於〕此には常に安息香を焼キ」（金光明最勝王經平安初期点, 131—11）、「此に來（り）て」（地蔵十輪經元慶点, 六一—8）、「其（に）王心に知ヌ」（大唐西域記長寛点, 卷3, 561—10）、「此に求（メ）彼に棄て」（白氏文集卷4天永点「澗底松」）, 一方、「此所」を「ここ」, 「彼所」を「そこ・かしこ」, 「其処」を「そこ」と読み得ることも、改めて言うまでも有るまい。しかし、複製公刊された古辞書類による限りでは、「一処（所）」という構成に成る熟字は殆ど見出すことが出来ず、〔書言字考節用集〕に「彼処、其処同」を見るくらいのものである。他は、「爰・是・焉・于・茲・此・奚・惟・斯・這」等の語に「ココ」, 「彼・他」に「カシコ」, 「彼・某」に「ソコ」という訓を与えているのみである。（「此間」「彼間」が〔名義抄〕にある）〔惠空編節用集大全〕に至っても、この状態は変わらない。であるからと言って、本集の「此所」「其所」「彼所」を「ここ」「そこ」「かしこ」と読まぬ方がよい、ということにはならないのであるが、ただ、本集に於ては、「ここ」は、仮名書き1例、「此」が9例であるのに対して、「此所」は1例のみ、又、「そこ」は仮名書き6例、「其コ」1例、「其」1例に対して、「其所」は1例のみであって、「此」と「此所」, 「其」と「其所」は、それぞれ異った読みが期待されているのではないかと考えられる。「かしこ」の仮名書きは本集には無く、「彼所」が一例のみであるが、以上の理由に因り、これをも含めて、「このところ」「そのところ」「かのところ」と読むことにした。

306 平（たひらぎて） 訓釈に「やはらぎて」と読んであるが採らない。〔呂后本紀延久点六オ五（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』）〕に「權欣交通而天下平治」〔法華百座ウ28〕に「カノ国タヒラキテ、ナカクタモツ事ヲナムエケル」が有る。「き」を濁音に読むのは、〔名義抄、僧中42〕「成」の訓表記に拠る。

後立テ（しりへにたちて） 訓釈のように「うしろに——」とも読めようが、〔字治170〕は「しりに立ちて行て見れば」となっているので注意を要する。これと同趣の表現は本集にもある。即ち、84「ヲノレカ馬尻ニ立テイマセ」、85「馬尻ニ立テ往」などである。してみると本例も〔字治〕の如く「しりに——」と読むのが適切と考えられるが、「後」を「しり」と読むことは、〔東大寺諷誦文稿239（中田祝夫『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』）による〕に、「家貧ク絶ニタル後シリ前サキ人ハ」の例もある故、不審ではないが、〔字類抄・名義抄〕共に、「後」の訓に「シリ」は見えず、「シリへ」とある。古く「まへ」に対する語は「し

りへ」であり、「うしろ」は背面を意味した。「うしろ」の意味が拡大し、「しりへ」が平安末期頃から衰退して「うしろ」に代られるのであるが、〔安田八幡宮蔵大般若経院政鎌倉初期点〕には、紙背に注記の存することを示すために、本文当該個所に「シリへ」と傍記された例が多数存し、「ウシロ」と記されたは例は、全く見当たらない、これは、「シリへ」が未だ生命力を保ち、意味を拡げながら用いられていた事を示す例であろうと考えられる。築島裕『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究索引篇』によれば、「シリへ」は、承徳三年点・永久四年点の双方に見られるが、「ウシロ」は永久四年点のみで、承徳三年点には見当たらないようである。以上の理由により、本例を「しりへ」と読むことにする。(参考文献)宮地敦子「対義語の消長」(国語国文37巻7号)、東辻保和「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多経に就きて」(海南史学8)

屋ヲヨリテ聞ハ「屋ニ」ではない。「ヨリ」は「寄り」であろう。〔今昔〕は「後ノ方ニ屋有リ。寄テ、立チ聞ケバ」とある。

- 309 ^{ヘトモ} 局 「局」は「局」の異字体、〔名義抄・節用文字・尊経閣文庫蔵字鏡抄〕には、これと小異有る異体字が、〔元龜本運歩色葉集二15ウ〕にはこれと同一字が、いずれも「ツボネ」の訓を有している。「へ」の訓は〔名義抄、僧中18〕に「甕へ(上)」とあるのが当るであろう。〔今昔〕「壺ヲ置テ」、〔字治〕「つぼどもを据ゑて」とある。尚、〔陽明文庫蔵三卷本枕草子24オー1〕にも同字が用いられている。「つぼね」と読むのであろう。
- 310 ニヨウ音〔天理本金剛波若経集験記〕に、「夜中(に)忽(ち)靈座(の)上(に)呻ニヨヒ吟コワツクリ(しを)聞(く)」(東京教育大学大学院中田教授国語学ゼミナール学生編『金剛波若経集験記古訓考証稿』の訓読文による)、〔名義抄、僧中27〕に「吟ニヨフ」、〔前田本字類抄、ニ部人事〕に「吟ニヨフ啞嘯」とある。(参考文献)森田武「徒然草の『によひ臥す』」(国文学攷19)、山田忠雄「漢和字典の成立」(国語学39)
- 312 講結城(かうけちじやう)〔前田本和名抄、卷三66ウ〕に「夾纈^{此間云加(平)}字(平)介(平)知(平)」、〔凶書寮本名義抄319〕に「夾纈^{賀(平)字(平)}計(平)智(平)」とある。「講」の字音仮名遣い「かう」については、佐藤喜代治「江・講・絳所属漢字の字音かなづかい」(『国語語彙の歴史的研究』所収)、岡本勲「江韻字の漢吳音としてのオ段長音の開合に就て」(国語国文40巻5号)を参照。
- 313 服(ぶくして)〔教行信証六本102〕に「如^ニ_ニ 獵(入) 師(上) 身^ニ 服^ニ (入濁) 法衣^ニ」とある。〔名義抄、仏中133〕に「服^上 伏(入濁)」。
- 317 堅指テ(かたくさして)〔今昔〕は「廻リノ門ハ強ク差シテ」。「鎌す」意。「指す」「差す」共に語源は同じとされる。〔名義抄、法下75〕に「関サ(平)ス(上)」も有る。
- 318 居所(きよしよ)〔前田本字類抄、キ部壘字〕に「居処」が有り、音読する。
食物(くひもの)〔黒川本字類抄、ク部飲食〕に「食クヒモノ」、〔字治〕に「人くひ物もちてきたり」とある。
- 322 御衣(おむころも) 訓釈は節用集類を引いて、「おんぞ」と読んでいる。「衣」を「ソ」とも読んだことは、〔前田本字類抄、コ部雑物〕に明らかであるが、本集には22「衣モ」の例が有り、「ころも」として用いられたことが明瞭である。又、平仮名和文語では、「おほむぞ」が一般的であっても、それを直ちに本集に適用することが妥当であるかどうか、文体の問題も絡む故に、軽々には断じ得ない。「おほむ」については今触れない。一方、〔法華百座オ234〕には「御コロモ」の例が有るので、暫く本例もそれに倣っておく。
飛テ出ヘクモアラヌ〔今昔〕は「可通出クモ无キ」とする。
- 323 足ノ对方ニ(あしのむくかたに)「対」の読みに就いて記す。訓釈「むく」に従う。〔字類

抄・名義抄] 共に「対」字に「ムク」の訓を与えていない。「ムク」という単独の訓そのものが登載されていない。しかし〔黒川本字類抄, ム部辞字〕に「向対(中略) 鶴^{已上同}ムカフ」とあって、「対」が「向」と同訓であることを知る。この個所は〔今昔〕では「足ノ向ク方ニ走ルニ遥ニ野山ヲ越テ人里ニ出ヌ」とある。これは、〔打聞〕の「対」を「むく」と読み得ることの一証となる。その他、次下の用例に基づき、上の如くに読む。

「いつちもいつちも足のむきたらむかたへいなむす」(竹取物語, 23オ), 「あしのむかむかたへ行かむとて」(大和物語, 255-8 <古典大系本>), 「足ノ向タル方ニ走ル程ニ」(今昔, 31の14)

324 対タリ(あひたり) 〔前田本字類抄, ア部辞字〕, 〔名義抄, 法下144〕に訓が有る。

上件(かみのくだり) 〔法華百座総索引, 補註オ74〕参照。

325 其所(そのところ)・彼所(かのところ) 305「此所・此」註参照。訓釈は「彼所」を「かしこ」と読んでいる。

326 其(そこ) 305「此所・此」註参照。訓釈は「それ」と読んでいる。

327 王城(わうじやう) 皇(去)城(上濁) ^{宮城部}ワウシャウ 〔前田本字類抄, ワ部疊字〕による。

付給(つきたまひ)〔今昔〕は「他ノ天皇位ニ即給ヌレバ」とする。本集の用字法では、①附着する。②鐘を撞く。④築く。③位に即く。等の意味に関わり無く一律に「付」を用いている。

<第9話 弘法大師請雨経事> 329行~333行

329 為神泉(しんぜんにして) ^{シンゼンセン}神泉苑〔最明寺本宝物集39ウ〕, 「泉」は「神」の舌内撥韻尾「n」の影響で連濁したものと考える。〔易林本節用集, シ部乾坤〕に「^{シンゼンセン}神泉苑」。〔今昔14の44〕に「神泉ニシテ請雨経ノ法ヲ」とある。(参考文献)小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」(広島大学文学部紀要29巻1号)

蛇(へみ) 蛇(平) ^{ヘミ}クテナハ 〔前田本字類抄, ヘ部動物〕, 訓釈は「くちなは」。

330 当リテ(あたりて) 〔今昔〕は「蛇只寄りニ寄来テ池ニ入ヌ」とする。

五人(いとり) 〔名義抄, 仏上1〕に「五人イ(平)ト(上)リ(平)」とある。

333 晁(ひでり) 〔今昔〕は「旱駸ノ時」とする。訓釈は「旱の通字として用いたものであろう」と説く。原本によれば、下に何かか隠れているように見えるが、未詳。

御修法行之(みしゆほふこれをおこなふ) 〔前田本字類抄, シ部疊字〕に「^{仏法部}修法シユホウ」とある。但し、次の如き用例も有るから、「みすほふ」と読むことも出来よう。「ほかにわたり給てみすほうなとせさせ給」〔源氏物語, 葵. 294-11〕。この句の読方については、小林芳規「^{平安鎌倉}時代^{に於ける}漢籍訓読の国語史的研究」第一章第二節により、仏書の訓法に従った。尚、「行」は、〔今昔〕の「被行ル、也」に倣って、「おこなはる」と読むことも出来よう。訓釈「みすほふおこなはる」

<第3話 唐僧入穴事> 334行~341行

334 非他事(たじにあらず) 〔文明本節用集349-3〕に「^{ナン}无ニ他事ニ」とあるのに従う。

物ノ為見物也(ものけんぶつのためなり) 「物ノ」の「ノ」は捨仮名と見る。「見物」は〔饅頭屋本節用集, ケ部言語〕に「^{ケンブツ}見物」とあるのに従う。

335 花開タリ(はなさきたり) 不信(の)人は花開キテ実(の)成(ら)不〔之〕樹(の)如(く)〔東大寺諷誦文稿369〕に拠る。

336 一花(ひとはな) 「一枝」との訓の調和を考えて読む、訓釈は「ひとつのはな」とする。

事極无シ(こときはまりなし) 訓釈は、〔名義抄〕の訓を根拠として、「極」を「かぎり」と読んでいる。しかし、本集には、この句と同義の表現として、「事限ナシ」「事限り无シ」「事限无シ」「事限无」「事无限」「事无限」等が存し、そこには「限」が用いられており、「極」の用いられたのは、ここ一例のみであること、及び、副詞として用いられた「極」は6例有るが、いずれも「きはめて」と読むべきであると判断されることの理由によって、「きはまり」と読むことにする。〔法華百座〕には「カキリナシ」7、「キハマリナシ」1、〔高山寺本古往来〕には「限り无シ」1、「キハマリナシ(極り无シ・極无・極マリ无シ・極無)」5例が見出される。橋本仲美氏によれば、「事カギリ(限)ナシ」は訓読語に近い性格を持つ和文体であり、「事キハマリ(極)ナシ」は、漢文訓読文体・変体漢文体であるとされる。(参考文献)橋本仲美「今昔物語集の文体に関する一考察—『事无限シ』をめぐって—」(国語学79) (付記)『打聞集』の文体傾向としては、漢文体(漢文訓読文体を含む)よりも和文体の勢力が強いとされている。宮田裕行「打聞集の漢文訓読語」(文学論叢27)、峰岸明「和漢混淆文の語彙」(『日本の説話7』所収)参照。

337 不得 127「心不得」、309「不得心」に照して考えるのに、「心」の脱字であろう。〔宇治171〕は「心えずおそろしく思て」とする。

338 コミ通 惣而此使共、老母などの候寺庵へこみ入候て〔高野山文書、永享五年十二月日(『大日本古文書、家わけ第一ノ四』68ページ)〕、御舟には人おほくこみの(ツ)て、馬たつべき様もなかりければ〔平家物語、知章最期。(古典大系本(下)223—9)〕などと同様の語構成であろう。

此ノ方既ニ(このかたにすでに) 総索引付並びに中島本は「此ノ方既ニ」と読むのに対して、訓釈・研究は「此ノ方免ニ」と読み、就中、訓釈は、「方免としか読めない。伊呂波字類抄などに『方面』が見えるから、おそらくその借字であろう」と説いている。しかし、本集には明らかな「免」字が三例(28・302・351)有り、いずれも異字体が楷書で書かれている。その中で、本例のみが草体であるのも不審である上に、底本の文字は「既」の草体と認め得る。この辺り、〔宇治〕には、「せばくおほえて、やうへとして、穴の口までは出たれどもえいずして」とあり、文意の上からも「既ニ」が適切であると考えられる。

339 出モ、天、(いでもいで) 「天、」は原本にて確認した。仮名「天」は、365「仰ラレ天」にも用いられている。

340 死ヌ(しにぬ) 「しにヌ」は中世語法、「人ノ頸キラレハソレニカハリテ頭ヲモキラレテシニナムトセント思キテ候へハ」〔却廢忘記、卷上18オ〕

石(いし) 〔今昔5の31〕では、これを「いは」と読んでいる。例えば、〔南无阿弥陀仏作善集〕には「石淵」が有るから、そう読むことも出来よう。

記(き) 〔宇治〕では「日記」とある。『大慈恩寺三蔵法師伝巻四』に、これと似た話が出ている。

<第三話 錢亀買人事> 342行~352行

342 錢セニ 「セニ」は「錢」の全訓。〔箋注和名抄、卷三84オ〕に「音容、世邇乃錢摸也」(青谿書屋本土左日記、一月九日)に「ぜにももてこず、おのれだにこず」とある。尚、〔法華百座総索引、補註オ34〕参照。

五千卷(ごせんぐわん) 「卷」は「貫」に音通。〔宇治164〕「錢五十貫」

大河(おほきなるかは) 〔今昔9の13〕「大キナル河」、〔宇治〕「大なる川」

辺(ほとり) 〔前田本字類抄、ホ部方角〕にある。

343 ト、問ハ(…ととへば) 「ト」は「問」の訓の第一音節を示す導入仮名。同じ例が71に有る。類例は125に有る。

344 云ク…ト云 「云ク」が会話文を挿んで「ト云」の終止形と呼応しているのは、本集ではここだけであるが、終止形以外とならば、次の如き呼応例が有る。

13云ク…云ケレハ 84云ク…ト…ト云ハ(一続きの会話文を一旦「ト」で分割している)
246云ク…ト云テ

又、「いはく」と訓じたと推定し得る「云」の呼応例には、次の如きものが有る。

21答テ云…ト云ヲ 179答云…トイフヲキ、テ 236云…ト云ケレハ 305云…ト云 390答云…ト云ハ 392答云…ト云 395云…ト…ト云テ

これを仏書の訓読史に照してみよう。「イハク」に呼応して「トイフ」等の如き呼応語を読添えるのは、平安初期では一般的であったが、鎌倉初期には、「イハク…ト」の如く「ト」のみを読添えるか、あるいは呼応語が無いかが一般であるとされる。(小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』401ページ) 本集には、「イハク…ト」の確例は無く、260「弟子問…ト」が有るのみである。(会話文を「ト」で分割したものは省いてある。)又、呼応語の無い例としては、

(35)三蔵ノ申云「昔尺迦如来(中略)引導ヘリ」国王問給ク(略)

のほか、62・76・303・304・406・407行を挙げることが出来る。尚、ク語法による引用の形式について、〔今昔〕〔宇治〕と比較した論文に、遠藤好英「打聞集の文章」(国語学研究2)が有る。

344 物ニセムトスル 「物」字に虫損が有るが、原本にて推定可能である。〔宇治〕「物にせんずる」自分の利益になるようにする意。後世の用法に通ずる。本集には、「ムトス」5、「ムズ」6例。

345 エウリタイマツラシ 85「タイマツラム」註参照。

346 隣国遣ツル(となりのくににやりつる) 〔今昔〕は「隣ノ国ニ遣ツル」、〔宇治〕は「隣の国へやりつる」とする。

348 フ員ニ 「員」は訓釈の説く如く、「意」の宛字と考えるべきであろう。但し、「員」は「キン」、 「意」は「イ」であるから、「イ」と「キ」との混同が有る。〔今昔〕には「不意ニ、水ノ中ニシテ」とある。

河中テ(かはななかで) 「デ」は「ニテ」の転に成る格助詞。近代語の兆。201「一人テ」註参照。

ウチ返テ(うちかへして) 〔今昔〕「船打返シテ死ヌ」、〔宇治〕「舟うち返して死ぬ」〔今昔(二)203ページ頭注12〕参照。

<第廿話 摩等聖弘仏経事> 353行~382行

354 摩等竹法蘭(まとう・ちくほらん) 〔今昔6の2〕の「名ヲバ摩騰迦・竺法蘭ト云フ」に従い読む。蓋し、「竹」は「竺」の省文であろう。〔越前丹生郡法雲寺所蔵道士勝負記〕には、「摩騰伽竺ノ法蘭ト云二人ノ之人トソ」と、「其名ヲバ摩騰伽竹ノ法蘭ト申ス二人ノ僧」との二様の表記が有る。(金沢大学法文学部論集22)

355 法門多シテ 「門」は「文」の宛字。193「法門」註参照。「多シテ」は、「多具シテ」の「具」脱かも知れない。〔今昔〕は「仏舍利及ビ正教多具奉タリ」とする。

大臣公卿(だいじん・くぎやう) 大臣公卿これを見て〔最明寺本宝物集42オ〕「大臣」の読方については、104「大臣」註参照。訓釈「おほいまうちぎみ・くぎやう」と読むが採らない。

356 多(おほかり) [今昔]「多カリ」に倣う。

何口(況) [今昔]は「何況ヤ五岳ノ道士ト云フ者」とする。総索引付と中島本とは「何覧」とするが従えない。訓釈は「何況」。原本によるも虫損の為に判読が容易でない。いま「何況」であるとして述べてみる。まず、親鸞の真蹟から二例を引こう。

① 何況^{イカニハハヤ}余^{オン}説^セ哉^カ〔西方指南抄, 中本41〕

② 何況^{イカニハハヤ}十方(去)群(去濁)生(上濁)海(上)帰^{スレ}命^ノ斯^レ行^ニ信^ニ者^ハ撰^シ取^ラ不^レ捨^ス
〔教行信証二, 104〕

小林芳規先生によれば、平安中期以後、仏書では「況」は、その下文が体言(又は準体言)のみで、「況」の上文と対比する場合は、「ヲヤ」で呼応するのが一般である。例えば①がそれである。それに対して、呼応語が無く結びが流れている、平安時代一般には見られない新しい用法が極めて少数存する。例えば②がそれである。本集のこの例は、後者に該当する。訓釈は、百論天安点や石山寺本妙法蓮華経玄賛古点の訓法に則り、「何況唐人云物ハ。」としているが、「唐人云物ハ」は「愁アヘル也」に係る語法と考えられるから、今採らない。(参考文献)大坪併治『訓点語の研究』476・604ページ。小林芳規『平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究』405ページ以下。

野干^ノ漢唐人(「漢」ミセケチ) 右傍の「野干」は狐であるが、何故にここに挿入されたのか不審である。あるいは、筆録に当って、語り手の「いかにはむやかん」という音声連鎖を誤って聞取り、即ち、「やかん」を一語の音連鎖と誤解して、「野干」を補入したのものであろうか。「野干」は仏典に屢々現れる動物名であるから、僧にとっては連想が働き易かったのかも知れない。但し、この推理には、「漢」がミセケチになった理由も絡むので、尚後考に俟ちたい。

358 白縁寺 [今昔]「白馬寺」〔西方指南抄, 上末63〕「白^{ハク}馬^バ寺」〔法雲寺所蔵道士勝負記〕「白馬寺」

360 仙人ノカハネ [今昔]「仙人ノ骸」, 仏舎利の卑称か。〔今昔(二)55ページ頭注〕参照。

364 アナクル 「ク」は濁音。〔名義抄, 仏下本46〕に「搜^ソア(平)ナ(平)ク(上濁)ル(平)」とある。「妙道を搜^ソクリテ〔而〕法一門を闢^ヒケリ」〔知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓66〔築島裕博士の訓読文に依る〕〕

370 二色(にしき) [今昔]には「東ノ方ニハ錦ノ幄ヲ長ク起テ、」とある。261・375にも同例が有る。

アク 〔図書寮本名義抄280〕に「幄^{アク}一音握……阿(上)計(上濁)波(上)利(上)」とある。

371 カミサヒ [今昔]は「髮□年老タル者共モ有リ」とする。ほかに〔同11の29〕「翁有リ(略)形チ髮サヒ, 氣高シ」という用例も有る。

往古(わうこ) [今昔]は「古ヘニ不恥ズ」とする。訓釈「いにしへ」〔前田本字類抄〕によれば、「イニシヘ」の所には「往古」は登載されておらず、(ワ部疊字)に、「往(上)古(上濁)ワウコ」が見当る。これに従う。

372 唐人ノ方 本話に登場する人名に連体格助詞「ノ」「ガ」のどちらが接しているかを、〔今昔〕の場合と見比べておく。

打聞集	今昔物語集
353 明帝ノ御時	明帝ノ時
372 唐人ノ方	道士ノ方
376 唐ノ方	道士ノ方

377 唐人方	道士ノ方
379 唐人法門	道士ノ方ノ法文
373 麼等カ方	摩騰法師ノ方
376 麼等カ方	摩騰法師ノ方
377 麼等カ方	摩騰法師ノ方
377 麼等方	摩騰法師ノ方
380 麼等方	摩騰法師ノ方

〔今昔〕では、「道士」「摩騰法師」共に「ノ」が接しているが、〔打聞集〕では、「唐人」には「ノ」,「麼等」には「ガ」が接している。この結果を「ガ」「ノ」に関する通説により解すれば、〔打聞集〕では「麼等」の方が低く見られていることになる。この事は、〔今昔〕が「摩騰法師」としているのに、〔打聞集〕は呼捨てにしていることとも対応するのかも知れない。

- 376 唐ノ方ニ (もろこしのかたに) 「ニ」は「ニオイテ」の意。「唐ノ方」が主格。〔今昔、頭注〕参照。
- 379 一時ニ (いちじに) 〔今昔〕は「道士ノ方ノ法文ハ一時ニ皆ナ焼畢テ灰ト成ヌ」とする。〔高山寺本古往来196〕に「九廻之腹一時ニ寸断」の用例が有る。
- 出血 (ちあやし) 〔今昔〕は「血ノ涙ヲ出シ」とする。〔名義抄, 僧下83〕に「出ア(上)ユ(平)」が有る。又, 〔最明寺本宝物集21オ〕に「提婆達多カ仏身よりちをあやしをもうらみ給はず」, 〔餓頭屋本節用集, チ部言語〕に「出血」が有る。他に, 〔宇津保物語, 春日詣280—8〕「ちりおつるはなびらに, つまもとよりちをさしあやして, かくかきつく」, 〔平家物語, 横笛 (古典大系本 (下)) 267—11〕「この身さへとらはれて, 父のかばねに血をあやさん事も心うし」などの用例が有る。
- 380 弟子成 (でしになる) 〔今昔〕「弟子ニ成リ」に倣い読む。訓釈「でしとなる」
- 381 随陽タイ「隋煬帝」 訓釈「ずる」は「ずい」の誤り。
- 382 欽明天皇 「欽」は初め「金」を大きく書き, 後で「欠」を加えたもの。

<第廿話 尊勝陀^ニ尼事> 383行~402行

- 383 西三条大殿 (さいさむでうのおほいどの) 〔最明寺本宝物集36ウ〕に「西三条大将」とある。〔古本51〕「さい三条との」
- 御タリケリ (おはしー) 「ケリ」に汚れがある。塗抹とは見ない。
- 大将 (だいしやう) 〔文明本節用集, タ部官位門〕「大師一将相当従三位」, 〔天正十八年本節用集, タ部人倫〕「大将左—右—」。〔日葡〕「Daixö. Certa dignidade em casa do Dairi. (内裏での一定の位)」
- 童テ長大マテ (わらはでひととなるまで) 「童テ」は複製本では「テ」の第三画の右に接して「、」が見えるが, これは原本によれば褐色のしみであって, 明らかに「童テ」と読める。〔今昔14の42〕は「未ダ童ニテ, 勢長ノ時マデ」とする。「長大」については, 〔斯道文庫蔵願經四分律古点 (春日政治『古訓点の研究』174ページ)〕に次の例が有り, それに倣う。「世尊ヲ乳養シテ, 長大ナラシメタテマツレリ」
- 384 夜遣 (よばひ) 夜遣^ハ夫婦分^カ (黒川本字類抄, ヤ部置字), 娉ヨ (平) ハ (平濁) フ (上) (前田本字類抄, ヨ部人事), 夜遣^ヨバヒ^ハ (伊京集, ヤ部言語進退)

- 好色テ (いろごのみで) 〔前田本字類抄, イ部置字〕に「好色イロコノミ」とあるのに従う。
訓釈「いろごのみにて」
- 本集所用の「ワ」の字形に酷似するが、それでは意味が通らない。脱漏を後で補入するための印としては、大き過ぎる。おそらく、初めから意図的に省略し、その印として書いたものであろう。〔今昔〕〔古本〕共に、相当箇所長文が有る。
- 美福門 (びふくもん) 〔前田本字類抄, ヒ部地儀〕に「美福門宮城門名」とある。
- 385 神泉北御門 (しんぜんのきたのみかど) しせんのかたのかたの御かたあきて候〔古本〕, 尚, 229「神泉」註参照。
- 386 コトネリ童 小舎人コトネリ〔前田本字類抄, コ部官職〕。「ト」の清濁については、〔静本運歩色葉集 271〕及び〔易林本節用集〕では濁音になっている。(饅頭屋本節用集は「コデヌリ」)。が一方、〔清原宣賢自筆塵芥, 下22ウ(京都大学国語学国文学研究室編)〕には「コトネリ」, 〔日本大文典(土井忠生訳 P. 749)〕には「Cotoneri (小舎人)」の如く清音の表記も見られるので、本例を暫く清音に読んでおく。
- 仍 (すなはち) 〔前田本字類抄〕には、この字に「スナハチ」と「ヨリ」の両訓が与えてある。本集には「仍」は二例有り、一は 282「天ニハマシロカストナム読シ仍天ニハ目シロカスト知リタレハ」の如く文頭に用いられている例であって、「よりに」と読んでおいた。文頭には仮名書きの 376「ヨリテ」も有る。文頭の「仍」を「よりに」と読むことは、和化漢文に於ける用法に一致すると認められる。それに対して、本例は文中の例であり、文意を汲んで「すなはち」と読むことにする。漢文訓読語には、この例が有る。例えば、〔興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点〕に多く認められる。
- 388 物独 (ものひとり) 「独」字に虫損が有るが確認出来る。訓は〔前田本字類抄, ヒ部辞字〕に従う。
- 391 無下ニ (むげに) 無気ムケナリ無下同〔黒川本字類抄, ム部置字〕
- 393 一度 (ひとたびに) ひとたびにうちけつ〔古本〕, さとひとたびに, 打わらひなと, したるほと〔陽明文庫蔵三卷本枕草子 24オ〕, 〔名義抄, 法下105〕に「一(度)ヒ(平)ト(平)タヒ」とある。
ナカナカ〔今昔(三) 336ページ頭注36〕参照。
- 394 アレ (吾) 〔古本〕も同じ。〔今昔〕では「我レニモ非テ」とある。〔大鏡, 道兼164(秋葉安太郎『大鏡の研究上巻』)〕「あれはまはしとてひつらひきみたり」, 〔同165〕「あた殿(略)あれかにもあらぬ御けしきなり」 宮島達夫編『古典対照語い表』によれば、平安時代平仮名和文では、「あれ」8例, 「われ」760例。
- サウシ (曹司・ざうし) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究資料篇』640ページ参照。
- 395 君ハ 訓釈「君」, 総索引付・中島本・研究はいずれも「若」とする。諸本の言う如く、この所は、「君」と「若」とが重なって見え、どちらが初めに書かれたものか、原本に拠るも明らかでない。しかし、一部に汚れも存するよう見え、一先ず「君」と判読しておきたい。又、若君のことを「若」という例は、時代が降るようであって不審である。
- 何コ (いづこ) 〔今昔〕「何ク」, 〔古本〕「いつく」。
- 396 夜ルアルキ 〔栄花物語, 卷七, 234-5〕には「よありき」の例が有る。「ものどもを見すぐしつゝあさましかりつる御よありきのしるしにや」
- 398 有様 (ありさま) 175「アリサマ」, 〔法華百座ウ280〕「道ノアリサマ」に従う。但し, 〔今昔〕「有ツル様」, 〔古本〕「ありつるやう」によって読むことも出来よう。訓釈「ありつるやう」

- 399、(ナ)ニカシ(なにがし) 自称代名詞の例。女性に用いられている所に注意を要する。
阿闍梨(あじやり)〔古本〕「せうとのあさり」,〔前田本字類抄,ア部官職〕「阿闍梨アサリ」,〔西方指南抄,中末33〕「彼阿闍梨」
- 400 サラサラムシカハ 「サラサラ」は「サーアラズーアラ」の縮約形。「サリ」と「シカリ」とについては,143「然ハ」註参照。
- 401 夜行(やぎやう)〔古本〕「やきやう」,〔最明寺本宝物集39ウ〕に「百鬼夜行ニあひて」が有る。

<第廿話 観寿寺事> 403行

- 403 宮地ノイヤマス 〔今昔22の7〕に「宮道ノ弥益」とある。尚,〔今昔四 239ページ頭注70〕参照。
観寿寺 〔今昔〕「勸修寺」
山科大領(やましなのかみ) 「宮地ノイヤマス」についての注記。〔前田本字類抄,カ部官職〕に「大領用郡」とある。

<第廿話 世尊寺事> 404行

- 404 伝 訓釈は「桃李藎大納言と云ひし人の住みしと伝ふ」と反読しているが,本集には,かように長い反読の例が無い。故に「つたふ。……すみけりと」と読む。

<第廿話 公野聖事> 405行~420行

- 400 公野聖 〔宇治142〕「空也上人」,〔元亨釈書,巻11(増補国史大系本)〕に「釈余慶(中略)忽空也法師入来」とある。〔法華百座総索引,補註オ244「空也ヒシリ」〕参照。
余慶僧正 『撰集抄』(岩波文庫)巻8第33では平等院行尊僧正となっている。
- 406 片(かたつかた) 片カタヲモテ
カタツカタ 〔前田本字類抄,カ部辞字〕,〔名義抄,僧中35〕にも有る。
枝(えだ) 「肢」に通じて用いられたのであろう。〔前田本和名抄,巻二27ウ〕に「肢躰野王案衣(上)太(上)肢作肢章移反亦」,〔前田本字類抄,エ部人体〕に「肢(平)エタ章移反(略)」とある。〔宇治〕「幼少の時,かた手を取て」,〔元亨釈書〕には「母患捉レ我投レ地。自レ爾左臂不レ順」とある。
- 407 ソコ 対称代名詞の例。〔宇治〕も同じ。
- 408 種姓(しゆじやう) 〔前田本字類抄,シ部疊字〕に見える。
三臂(みかひな) 「御臂」の意。〔宇治〕は「御臂」。
- 409 加持セシメ給 「シメ」は,尊敬助動詞「シム」の連用形。
- 410、(ハ)タトナリテ 〔宇治〕「曲れる臂はたとなりてのひぬ」〔元亨釈書〕「釈余慶(中略)乃執レ也臂レ引之。爆然声出。屈伸如レ右」
- 412 ホクノ聖 反故(平)ホク俗
ホンゴ 〔前田本字類抄,ホ部雑物〕 「ク」は清音。
- 413 有シ 「シ」は回想助動詞連体形。こは,連体形終止法の例。
東市門 総索引引は「東南門」とするが不可。東西の市については,『延喜式巻42,東西市司』参照。
カナキハク 訓釈「かなぎはぐ」とするが採らない。「カナキ」は,〔伊勢十卷本和名抄,巻五,刑罰具75〕「鉗奇炎反加(上)奈(上)岐(上),以レ鐵束レ頸也」〔前田本字類抄,カ部雑物〕「鉗(上)カナキ鉗同」,〔名義抄,僧上114〕「鉗カ(上)ナ(上)キ(上)」,「ハク」は,〔名

義抄, 仏上28]「佩ハク」, 即ち罪を犯して罰せられる意であろう。「カナキ」については、中島本が「鉄木(カナギ)……は、頸にはめる鉄製の刑具か」と説くのに左袒したい。→補註2
414 知識ヲ引テ [日本霊異記, 中31]に「引_レ 率知識_一 建_レ 七重塔_一」とあるのが参考になる。

「知識」は結縁の集団をいう。

チス(ちす) [高松宮御蔵河内本源氏物語, さかきの巻(複製本83ページ)]「たまのちく・へうしひも・ちすのさま」の「ち」の左肩に朱濁点が有る。「帙簀」を当てるが、「帙」は音「秩」, [前田本字類抄, チ部人事]「秩_チ(平濁)ツ(平)」、[書言字考節用集, 八冊15]「帙書衣也」とある。

415 寤夢(ねたるゆめに) 「寤」は[名義抄, 法下64]に「サム・サトル」とあって意味が通じない。おそらく「寐」等の誤りであろう。「寐」は[名義抄, 法下64]に「イヌ・フス・ネタリ」とある。[名義抄, 法下46]には、「寤寐サメテモネテモ」が有るが、一方、[浄土高僧和讃105]には、「寤(上濁)寐(平濁)」の左傍に「ネテモサメテモ」と、訓が逆に施された例が存する。あるいは、本集の筆者も此と同様の意識で、「ぬ(寐)」と「寤」とを結付けたのかも知れない。

前生(ぜんじやう) 「生」は「前」の舌内撥韻尾〔n〕の影響で連濁したものと考える。[教行信証]に「群(去濁)生(上濁)海(上)」(二の104, 三の49)等の連濁の例が有る。[静本運歩色葉集427]「前生」

416 モ以セテ(もたせて) 「モ」を導入仮名と見る。訓釈及び中島本は「モ」を助詞として「…
…モ_も以セテ」と読むが、それでは「モ」の用いられた理由が定かでない。

418 開見ハ(ひらきみれば) 文ヲ、ヒソカニヒラキミサフラヒシカハ[法華百座オ326], 消息アリ, ヒラキ見給ニ[同ウ151]

八角(はつかく) [前田本字類抄, ハ部疊字]の「八(入)講(平)仏法部_{ハツカウ}」, 「八(入)教(平)ハツケウ_{釈教分}」等から類推して読む。訓釈「やすみ」

420 啼 文脈からは「なみだ」の期待されるところである。「涕」(あまつび)を「涕」(なみだ)に通用させようとして、「涕」を「啼」に誤ったものか。

<第廿話 補陀落寺屠児事> 421行~427行

421 若小時(にやくせうのとき) [専修寺本唯信抄文意84]に「若_{ニヤク} 少_{モウ} 心_{シン}」とある。但し、[易林本節用集, シ部人倫]には「若_{ニヤク} 少_{モウ}」とある。訓釈「わかきとき」

夫(をうと) 夫_{和名乎} 止_乎 云_乎 古_乎 [元和古活字本和名抄, 巻二, 20オ]

422 云々(うんうん) この所, [今昔15の27]に於ては詳しい叙述が続く。「云々」は本話に七例を数え, 本集中で最も多い。本話の構成に就ての詳細な分析と, 「云々」の意義付けとが小林保治氏の論文に見える。(291「云々」註参照)

夜半(やはん) [黒川本字類抄, ヤ部疊字]に「夜半_{天部} 晨夜分_分」とある。訓釈「よなか」

入持堂 「持堂」の二字に虫損が有り, 殊に「持」字がひどい。又, 複製本によれば「堂」に塗抹の跡らしいものが見えるが, 虫損である。「持」は確認し難いが, おそらく最も近いと思われる。もしそうとすれば, 研究の説くように「持仏堂」の「仏」が脱落しているのであろう。

424 此所ヲハ(このところをば) [今昔]も同じ。[今昔(三)382ページ頭注28]参照。

修行者(しゆぎやうじや) [前田本字類抄, シ部人倫]にある。尚, [法華百座総索引, 補註オ23]参照。

426 夜𠂔 (よべ) 「よへ」の仮名書き例が源氏物語に多い。〔青谿書屋本土左日記〕に「よむへ」、〔古本〕に「ようへ」(第23), 「よへ」(第54), 〔前田本字類抄, ヨ部天象〕に「宿^ヨへ^ネ」等の表記が見られる。

補註1. 栄源が天台僧であることは、片寄正義「打聞集についての再吟味」(書誌学16巻4号)、小林芳規「中世片仮名文の国語史的研究」(広島大学文学部紀要特輯号3)参照。

補註2. 〔西宮記卷二十一(故実叢書)〕の「於市行事」によれば、「市司式云、決罰罪人者、官人与使相对楼前罰之」、「長保元年十二月十六日、着鉢政於東市行」、「佐命云、依例給鉢、詞云、依^ニ蹤^ニ加^テ看^ル督^シ長^ク称^シ唯^ク訖^ス」等の記事が見え、「鉢」を「加奈支(カナキ)」といったこと、市において罪人に「着鉢政」が行われたことがわかる。「カナキハク」とは、この「着鉢」をいうのであろう。尚、「市」に門のあったことは、〔拾芥抄(附図)〕により知り得る。以上は玉井力助教授(日本史学)の御教示による。

付記 小稿は、旧字体で書いてあったのであるが、印刷の場合で新字体になってしまった。不本意ながら、このまま報告させていただく次第である。

(昭和52年8月15日受理)

(昭和53年1月6日分冊発行)